

菱川師福翁記念文庫展



平成3年度秋季特別展

菱川師福翁記念文庫展



菱川師福翁

9月15日(日)～10月20日(日)

福井市立郷土歴史博物館編

凡 例

一、本書は、郷土の画家として知られる菱川師福翁の歿後五〇年を記念し、平成三年九月一五日～一〇月二〇日迄を会期として開催した、秋季特別展「菱川師福翁記念文庫展」の解説図録である。

一、収録作品は、「早瀬来山」（師福の師）・「菱川師福」・「平林清輝」（師福三男）・「菱川土萌」（師福六女）の四項目に分類し、解説してある。

一、前半部に主要作品の写真を収め、後半部には略系図・略年譜・資料及び全作品の解説を、概ね年代順に配列してある。

一、解説は、原則として作品名・材質・数量・解説・寸法・所蔵者名の順に記述してある。

寸法は、すべてセンチメートル、縦×横の順である。

一、所蔵者名は、本館の收藏品については「菱川師福翁記念文庫蔵」「本館蔵」の外、「〇〇市 〇〇〇氏贈」「〇〇市 〇〇〇氏託」として寄贈品・寄託品の別を示した。また、今回の特別展に限って諸家より借用した品々については、「〇〇市 〇〇〇氏蔵」等と表記してある。

一、収録作品に付した番号は、図版・解説に共通している。

菱川師福翁記念文庫 菱川師福の七女で、神戸市在住の豊島初音氏より、昭和三六・三七・三八・四〇年の四次にわたり、当館に寄贈された師福関係資料。総数約二〇〇〇点。師福の作品・下絵類のほか、画材用収集資料・絵道具・家譜などがあり、六女琴房（菱川土萌）の作品も含まれる。



⑤岩上鷹図



⑬梧桐鳳凰圖鏡繪



⑬毫拵寺御影堂内陣天井絵



⑭ 菜祀図屏風



⑦馬威図屏風



⑨九十九橋図 平林清輝筆



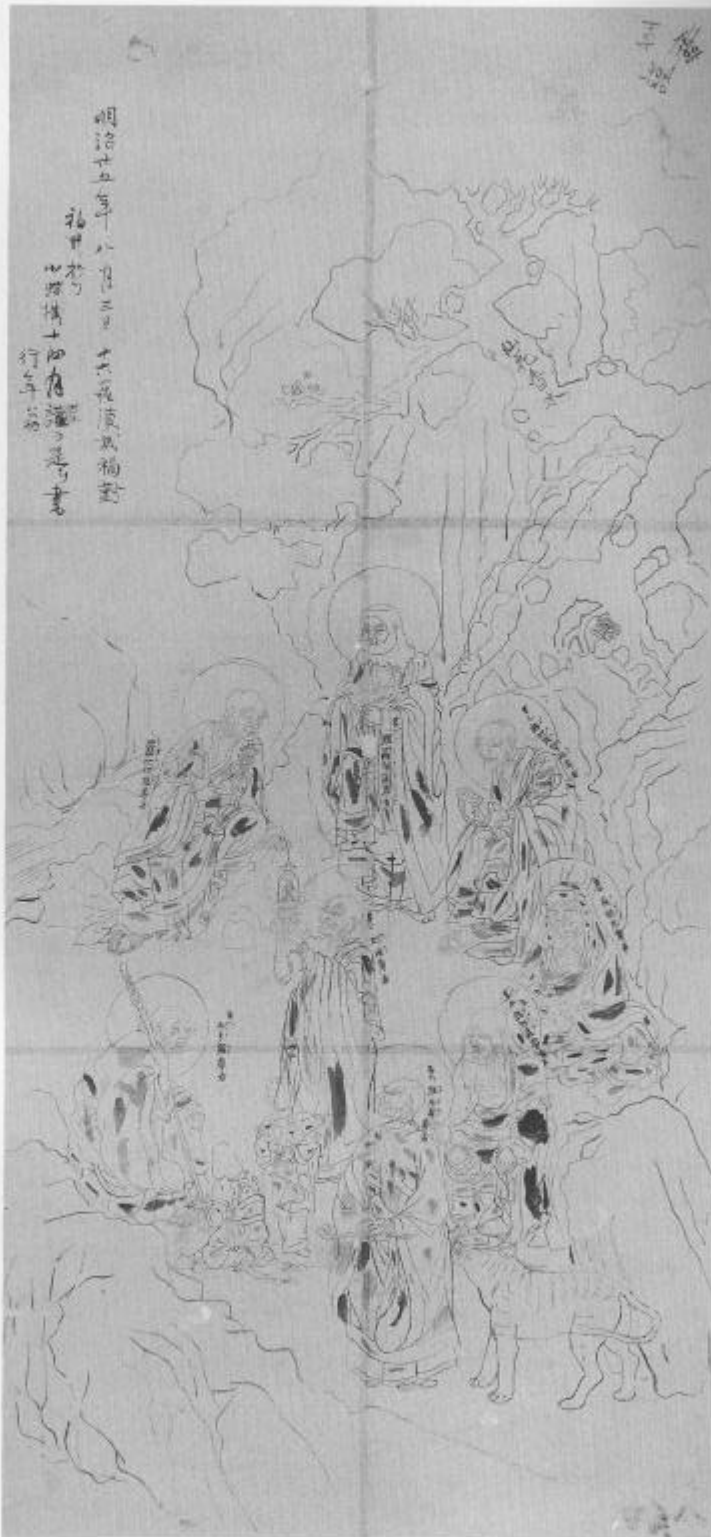
④ 観音来迎図 菱川土萌筆



④馬図繪馬



⑧十六羅漢図下絵



明治十五年八月三日 十六夜 廣風 福壽
福中 於乃
世尊 佛十 如 有 羅 漢 是 有 意
行年 二 如

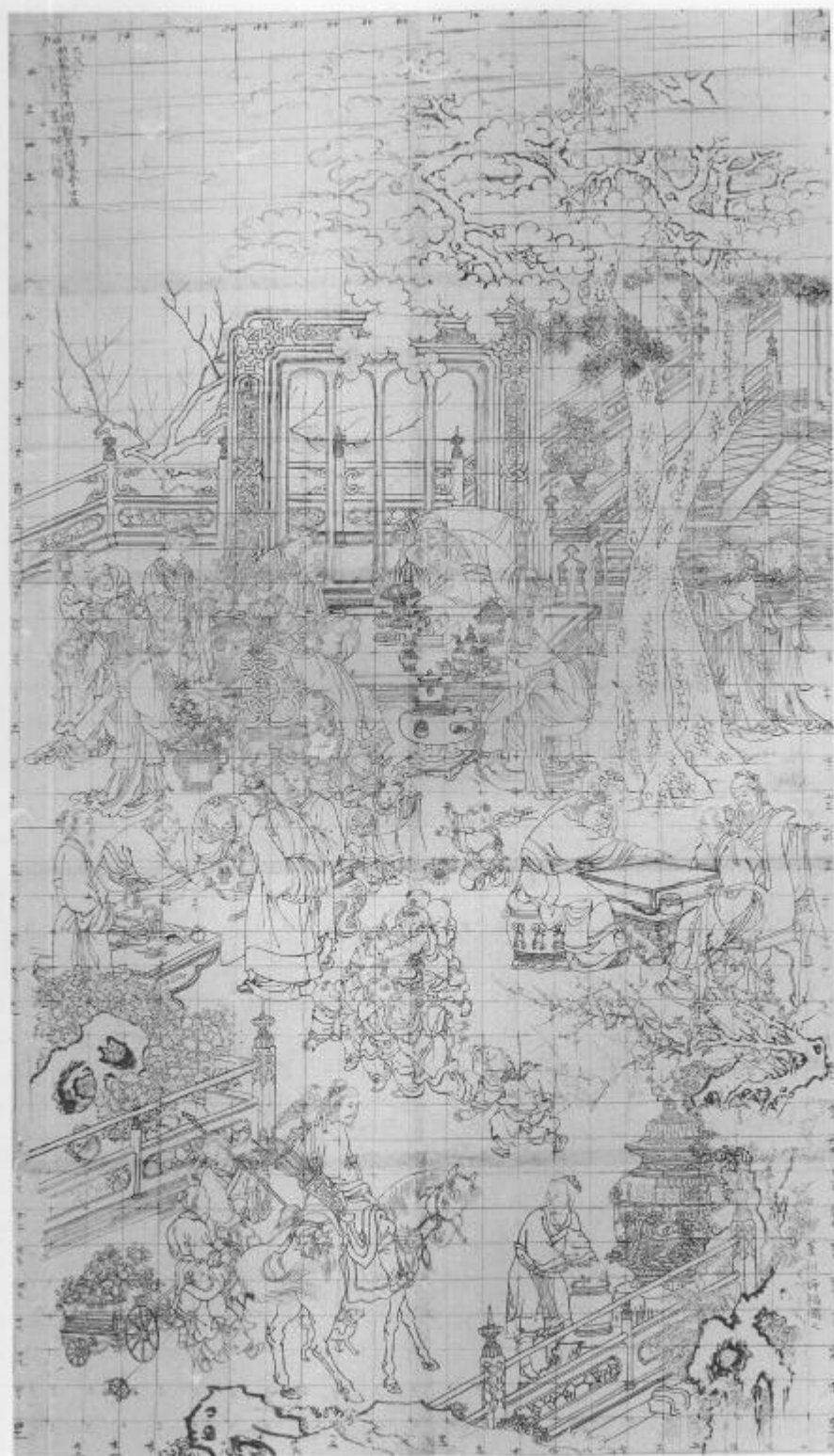
福壽
廣風



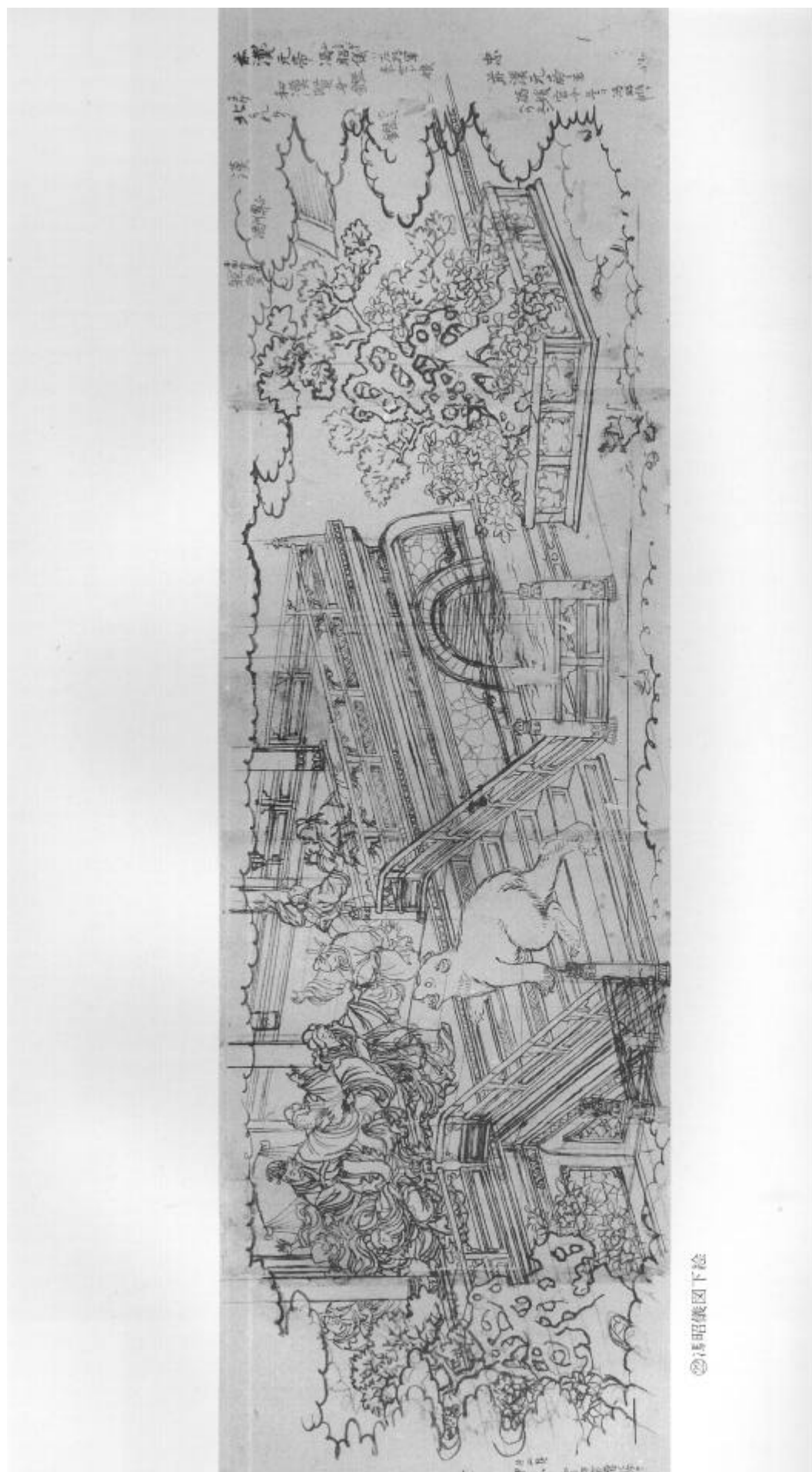
⑬劉伯倫圖下繪



⑤百福園下絵



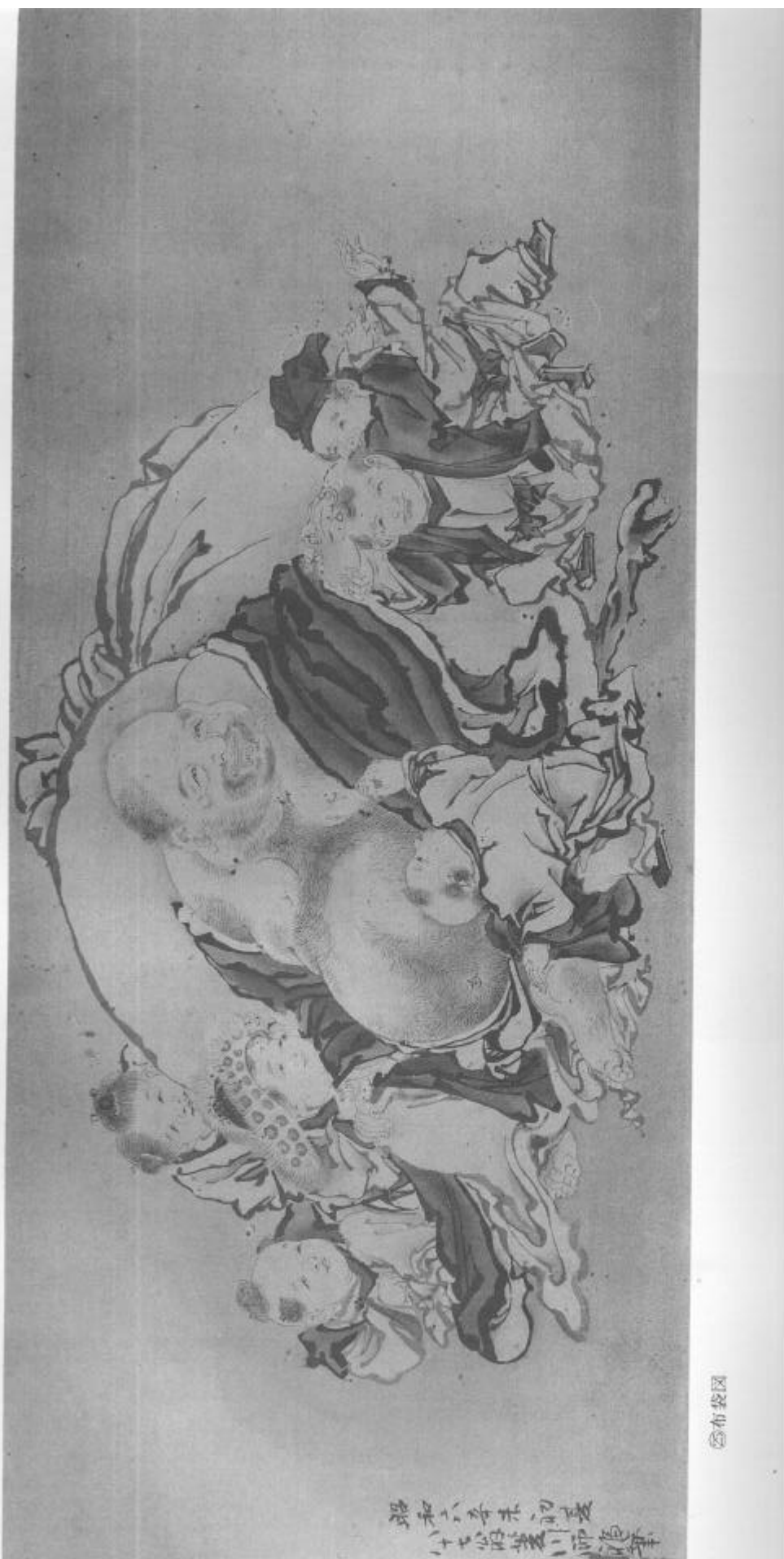
⑮ 廓子儀圖下繪



② 昭義圖下繪



◎涅槃圖下繪



昭和六年未だ長
八十七公時畫川柳筆

布袋額面描畫に就て

新樹緑濃く藤影畫靜かに心身
自空爽快なり先軀を画室に運ばし
容姿を齊へ筆を揮ひこの布袋を
描き之を男教に那に贈る

この画を専ら結構點漆の整齊に
留意し一線一林典型を脱せし特に
筆力の氣韻を考慮して揮毫
したるを以て眺たるこの画面には別
ち父の人格顯はれ心血流れ居る
あり宜しく之に對するは父に
對するか如く思ふべし

昭和六年六月

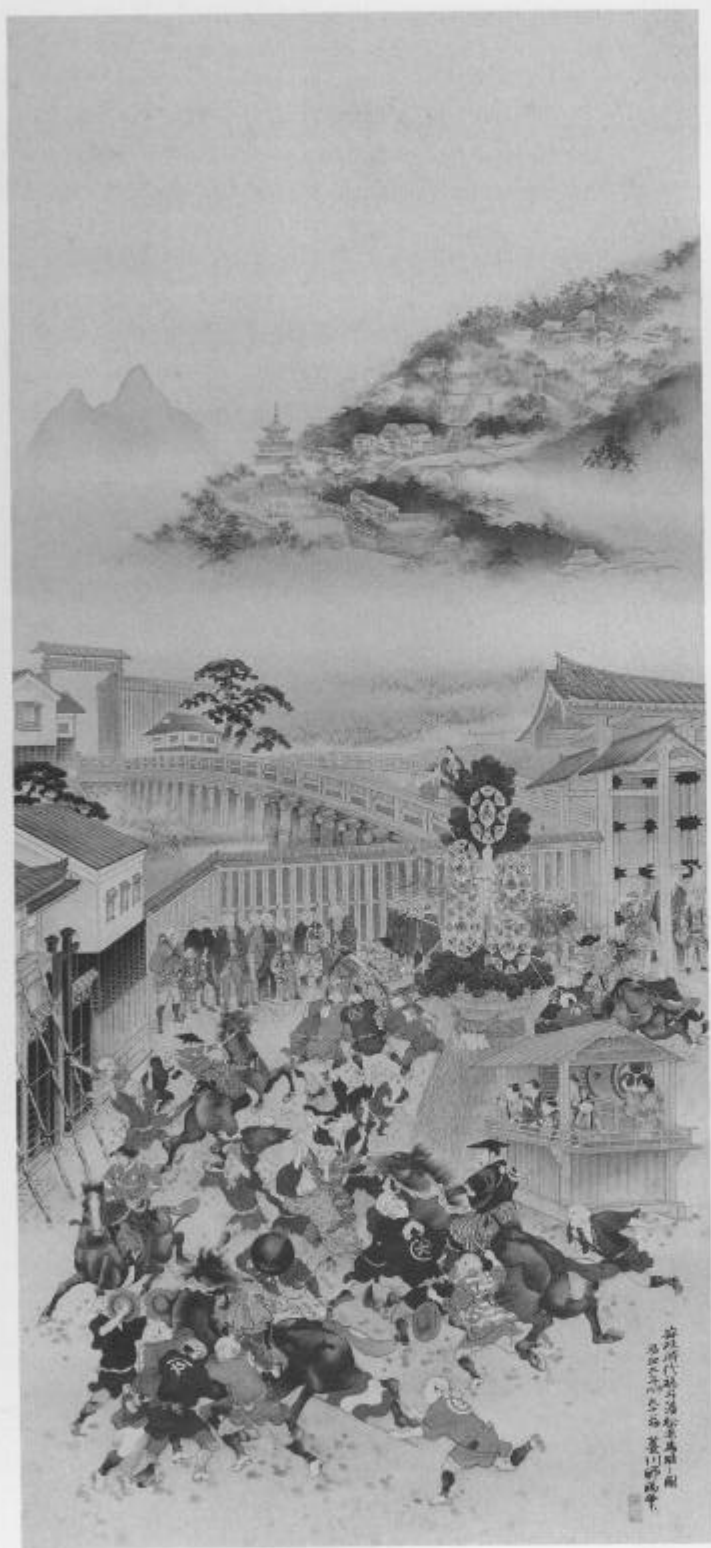
八十七翁佳嶽堂畫川師福



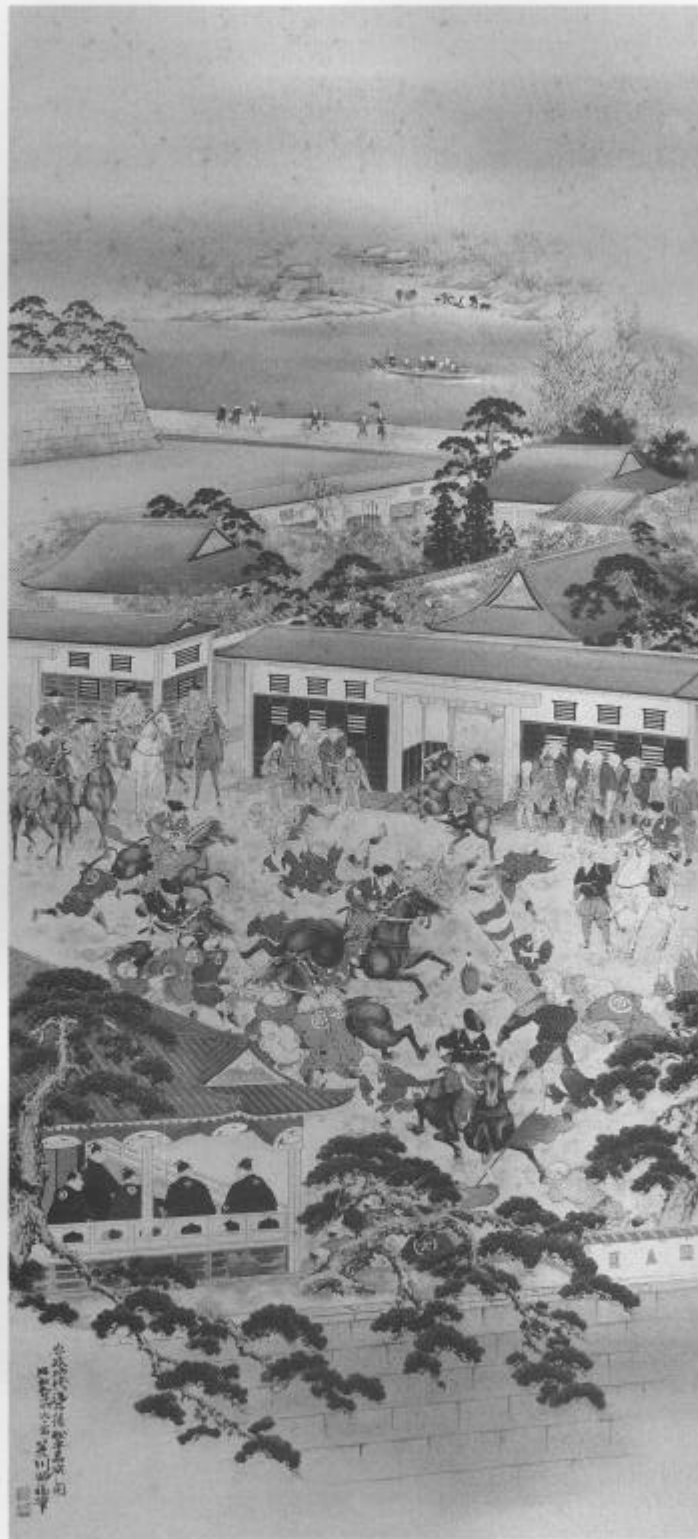
⑤布袋図添書「布袋額面描画に就て」



◎楠曙覧肖像画



⑪馬威凶





⑤ 信股くぐり図



⑦聖德太子図 平林清輝筆



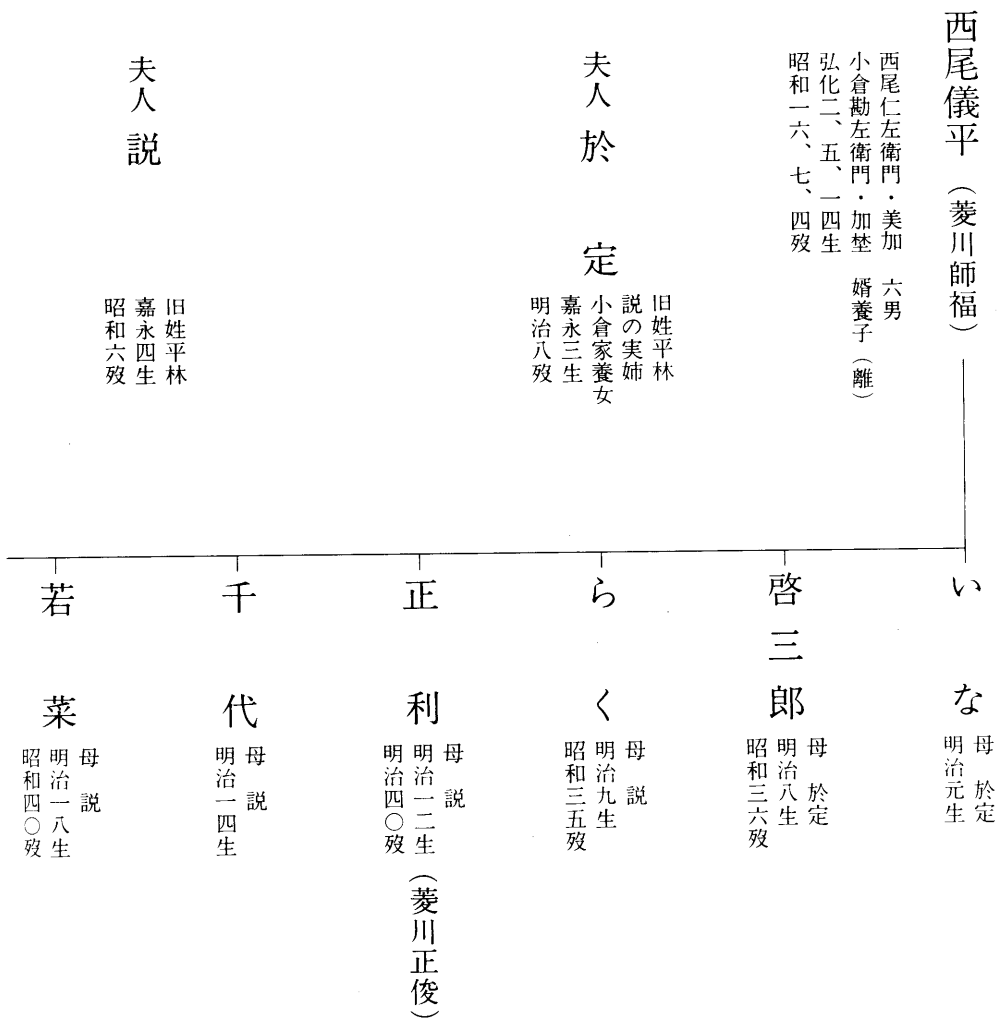
⑤神功皇后圖 菱川土萌筆

• • • •
解 資 略 略

年 系

説 料 譜 図

略系図



夫人や

な

旧姓後出
明治二生
大正三歿

夫人つ

ね

旧姓松嶋
明治二〇生
昭和一九歿

喩吏治艫

母説
明治二一生
昭和三八歿

(平林清輝)

静

母やな
明治二五生
明治三七歿

琴

房

母やな
明治二八生
昭和二九歿

(菱川土萌)

美

香

母やな
明治三二生
明治四三歿

初

音

母やな
明治四〇生

松太郎

母つね
明治四一生

略年譜

年代	年齢	事蹟
弘化 二(一八四五)	一	<ul style="list-style-type: none"> ○五月一四日、福井上三ツ橋長蓮寺向(現、福井市照手一丁目一二)に生まれる。父西尾仁左衛門(傘・提灯製造業——現、ねこせや)、母美加、六男。名は儀平、幼名は十四月・豊吉。 ○幼少の頃、歌人橘曙覧の藁屋(現、福井市照手二丁目五十一三)に通い、手習をうける。
安政 三(一八五六)	二	<ul style="list-style-type: none"> ○西御堂(西別院 現、福井市松本四丁目九一二)の再建に際し、襖・欄間・格天井の画を揮毫。手間賃、一日五匁。 ○その後、福井の絵師早瀬来山(文化五、明治二三)に師事し、四条派の正統を学ぶ。来山より画号「青峰」を贈られる。
慶応 二(一八六六)	二二	<ul style="list-style-type: none"> ○吉田郡松岡村窪(現、松岡町薬師二)の士族、小倉勘左衛門(荒物屋)・加埜の婿養子となる。妻(名は於定)は神崎屋と称した平林家(薬師二)の娘で、小倉家養女。
明治 八(一八七五)	三一	<ul style="list-style-type: none"> ○夫人病歿(享年二八)、説(亡妻の妹)と結婚。
一二(一八七九)	三五	<ul style="list-style-type: none"> ○六月六日、離縁。
二五(一八九二)	四八	<ul style="list-style-type: none"> ○二月二七日、画業に転じる決意を固め、福井市江戸下町三六番七へ転居。
二八(一八九五)	五一	<ul style="list-style-type: none"> ○三月、やな(三番目の妻)と同居。
三二(一八九九)	五五	<ul style="list-style-type: none"> ○春、旧福井藩士奥山美政を頼って上京(三年間)、歌舞伎劇場市村座(江戸三座の一つ、昭和七年焼失)で「吉例會我の大磯の虎の図」を揮毫。 ○一月二五日、福井県知事関新吾より画号「菱川師福」を贈られ、福井の風月楼に於いて披露宴が催される。
三四(一九〇一)	五七	<ul style="list-style-type: none"> ○この頃、曹洞宗大本山永平寺六四世、森田悟由禅師より画号「佳嶽堂」を贈られる。
三六(一九〇三)	五九	<ul style="list-style-type: none"> ○地元福井の有志を中心に、師福の絵画奨励会が結成される(日露戦争により中絶)。 ○大阪市天王寺で開催された、第五回内国勸業博覧会(三月一日〜七月三十一日)に「廓子儀図」

四〇(一九〇七)	六三	を出品。作品は陸軍中将前田隆禮(男爵)の家什となる。
四一(一九〇八)	六四	〇十一月一日、福井市宝永小学校で開催された北陸臨池会に於いて、絵画揮毫会を開く。
四四(一九一一)	六七	〇一〇月七日、旧姓「西尾」に復し、やまと結婚。
大正元(一九一二)	六八	〇この頃、福井市宝永上町四二番地(現、宝永四丁目八)神明神社境内に居住。
		〇八月、自ら美術寮・百幅会の設立を発起し、事務局を福井市尾上下町(現、宝永三丁目三五)竹沢市郎平宅に置く。
		〇親鸞上人御遠忌六五〇年を迎えるにあたり、浄土真宗出雲路派本山、毫撰寺(武生市清水頭町二一九)の襖絵「梧桐鳳凰図」・壁画・天井絵(花卉・野菜 四九五枚)を揮毫。
		〇四月二六日、福井市豊島上町一〇七番二へ転居。家主は諸田甚平。家賃、月六円。
		〇自らの墓を建てる(費用一二円。福井市足羽山の西墓地公園内、興宗寺墓域に現存)。
		〇五月三〇日、六女琴房(菱川土萌・母やな)に家督を譲り、分家独立。
		〇九月一日、福井市日ノ出下町四八番地(現、日之出二丁目七)へ転居。松平家貸地二一八坪五合(表一間五分、裏一二間二分、奥行一〇間)。家賃、月二円三七銭。
		〇三月六日、夫人歿(享年四六)。
		〇五月、つね(四番目の妻)と同居。
		〇二月二日つねと結婚。
		〇五月、愛知県知多郡岡田町(現、知多市岡田)の煉瓦工場主、安島重盛の世話で岡田町薬師前(字上中田)に滞在。
		〇晩年、松嶋松太郎(つねの連子。師福の勧めで常滑陶器学校に入学、陶工として活躍)の住む愛知県知多郡常滑町北条(現、常滑市原松町)と福井とを度々往復し、作家活動を続ける。
		〇一月八日、皇太子殿下福井行啓。「旧藩士馬威図」三枚一組を献上し、採納の榮に浴す。
		〇名古屋市中区矢場町、曹洞宗永昌院(現、中区松原二丁目)に所在)の依頼により涅槃図を揮毫。
		〇今立郡今立町栗田部、岡太神社へ奉納の「菜祀図屏風」を揮毫。
		〇福井市葵町(現、みのり一丁目)の豪商、片山外吉の依頼により「馬威図屏風」を揮毫。
		〇七月四日、愛知県知多郡常滑町瀬木(現、常滑市瀬木町)で歿す。墓は北条の区有墓地に現存。
昭和一〇(一九三五)	八一	
昭和一〇(一九三七)	九一	
昭和一〇(一九四一)	九七	
一三(一九二四)	八〇	
一四(一九二五)	八一	
一五(一九二六)	八二	
一六(一九二七)	八三	
一七(一九二八)	八四	
一八(一九二九)	八五	
一九(一九三〇)	八六	
二〇(一九三一)	八七	
二一(一九三二)	八八	
二二(一九三三)	八九	
二三(一九三四)	九〇	
二四(一九三五)	九一	
二五(一九三六)	九二	
二六(一九三七)	九三	
二七(一九三八)	九四	
二八(一九三九)	九五	
二九(一九四〇)	九六	
三〇(一九四一)	九七	

資 料

米寿を迎へた菱川師福画伯の事ども

禿 山 樵 夫

(上)

菱川師福翁は弘化二年五月、福井三ツ橋の質屋西尾仁左衛門の第六男に生れた、母みかゞ翁をみこもつて、十四ヶ月目に生れたといふので、幼名を十四月トヨキと呼んだが、皆が豊さんと呼んだのであつた、父仁左衛門は若くして死し、母みかゞ六人の遺孤を擁し、次第に家道振はず、一家没落の悲運に遭遇した。

翁は自然生えの画師で四才の時鼠の榊落しの絵を画き、見るものから、其の画才をた、へられたが紙と筆さへあてがへば、何かなし思ひつき次第に書きちらし、それが画になつた、しかし紙一枚二文するその頃、産を傾けた西尾の家にとつては、二文は中々重く、紙は自由に得られない、或る時障子紙のめぐりを、さがし出していたづら書きをし、兄から手ひどい折檻を受けたこと等もあつた。

翁は五六歳前後から、寺小屋に通ひましたが、それが橘曙覧翁の塾で曙覧翁の嗣子今滋先生に教へを受けたが、翁は手にあまる腕白もので、いつも手習をよそに、草紙の白い處に画を書いて、先生からいつも叱られたといふことである、時々おかあさんのいひつけで塩町に塩味噌をかひに行くと、朋輩が

十四月どこへ行く味噌かいに

いふてくれるな恥かしや

とはやしたてるので、まけじたましいの翁は、愛犬をけしかけ、相手を泣かせたりしたものである、かくてどこの寺小屋でも持てあまし、どこでも体よくことわられたといふことである。

×

次第に不如意になつた西尾家の子供達は、皆それぐ働かねばならなくなつた、昔から芸が身をたすくる不仕合せといふが、翁の手業は一かど役に立ち、子供の紙鳶の絵や、行燈、絵傘から下駄の表、玩具の絵等を書いて一かど家計を助けたのであつた。

翁には未知の師があつた、その頃江戸の民衆に歓迎された江戸絵、豊国国芳あたりの江戸絵が、土産物として持帰られ、屏風の貼交ぜ等に用ゐてあつたのに翁は極度の興奮と憧憬をもつて、其芸術の生命をつかんだ、この江戸絵こそ、自然生えの翁の芸術を陶冶する、師匠でもあり心の友でもあつた。

翁が多くの日本画家が、題材として取扱つた静物よりも、より多く生物に引つけられる、素地を作つたことは、疑もなき事実である。

×

十二才の時西本願寺別院の修理に柱の金欄卷、格天井の彩色画をかいたが、其頃大工手間が一日二匁の犬の札であつたが、翁は五匁の羊の札をもちつたといふことである、其後五分市の毫攝寺でも同様な仕事をし、其所縁によつて、同寺の什品となつて居る、同寺の乳母のえが野猪と格闘せる図は、翁の筆になつたといふことである。

此後翁は、福井藩の御絵師早瀬来山の門に入つて、四條派の

正統を学んだ。

× 来山名は鴻字は子漸、父蘭川の業を継ぎ、京都に遊び松村景文岡元豊彦等に就て画を習つた、豊彦来山の画才あるを見て、養つて嗣子となさんとしたが、父蘭川は来山が大家のあとを嗣ぐことを望まないことはなかつたが、来山は蒲柳の質であるので之を辞した、後福井に帰り画を業とした。

× 次子和三郎雲峰と号し、又松石といひ画才があつた、福井東別院対面所の張付壁画、大舜耕作の図は松石の意匠になり、其逝去後来山によつて完成されたのであつた、西別院白書院の襖の孔雀の絵は、来山は四條流の正統を伝へ、其筆になつたものである、来山は花鳥人物山水と画境も広く、其画は相当品位と風格を備へたものである、資性温厚にして円満な人柄であつた、六十才以後には右手が慄へ筆を取る事が稀れであつて明治廿三年二月五日八十三歳で筆を易へた。

× 来山は師福の画才を認め、松石なきあとの、早瀬家の嗣子たらんことを望んだが、師福の芸術も其の性格も、象牙の塔中に因はるるには、あまりに奔放であり、圭角もあつた、師福にして若し早瀬家の人となつても、来山の四條流の流統の型にはまつた、くびきをかけらる、ことを喜ばないだらうし四條派から出た、円山芸術が師福のねらふ画材に相似点があるにしても、その表現とこれを取扱ふ感情に於て、全然相容れぬものがあると思ふ。

× 然かし師福翁の大成した芸術には、四條派の感化が多かつた

ことは、否めないようである。

× 先年故人となつた吉川靈華画伯は、師福翁の画を取て、四條から出た画だと評したといふことによつても、来山の感化は相当地大きかつたものと思はる、

師福翁は筆をとれば人物を絵き画想を練つて、過去に此題材を求むれば、直にその物語となる、好んで人物を画き、人物を中心とした一幅の画に社会百般の風俗を描写し、人情を説明することが筆の芸術境であり、此人生観であることが、丁度大和絵の絵師や浮世絵師と、其歩調を一にしてゐる。

× 日本画の鑑賞は、因襲的な山水風景、或は花鳥に遍して、風俗画を卑近なものとし、軽んじた風があつた、風俗画は江戸の民衆によつて、初めて鑑賞価値が発見せられ、大衆向きに肉筆よりも版画として、大量生産の必要を生じ錦絵として発達したものであつて、其発達にともなつて、一部の浮世絵師は、僅に生活の苦難から脱し得たものであつたらうが、葛飾北齋の如く、軒軻不遇、閭巷に窮死するものさへあつた、まして、草深い田舎住ひの画師である師福翁は、生活に苦しみぬいたが、翁のまけじたましいと、自然兒としての誇持は幼少時代に、江戸絵豊国国芳等によつて得た、感激と憧憬を胸にいだきしめて、自分の信ずる芸術境に進出した勇氣と自信とは、我等の推奨しなればならぬ点だと思ふ。

× そふこふする中に、あの王政維新の波瀾は、芸術等といふものを社会の底にうづめてしまつて、画家、彫刻家等の受難時代が来た、如何に強情我慢の師福翁と雖も、雌伏を余儀なくされ、慶応二年吉田郡松岡の荒物屋小倉儀平の養子となり、絵画の生

活より遠ざかること、なつた。

(中)

小倉の家は、米、糸、菜種、真座などを商つて居たが、養父の死後、芸術家肌の翁の商法は、失敗が多くやはり彩管を手にして立つことが其天分であり、ふさはしい生活でもあつた、かくて翁は福井に帰り、画家として再生した。

明治廿年以後は、維新の変革にもなう、人心の動搖は較落つき美術工芸の復興時代に入つたけれども、其恩沢は田舎住ひの翁に及ぶに至らなかつた。

この時代は、翁の雌伏時代でもあり、自らを養ふ時代でもあつた各旧家の所蔵になる古名画や、寺院の古仏画の模写にこれ日も足らず、自己の興味に即した画境から歩一步研究に没頭すべき、よき機会が与へられたのであつた。

其頃の翁の窮乏は、北斎や草雲等のそれに比すべきものがあつた翁は米塩の資を得る為に、涼み提灯の絵、傘の絵まで画いた、傘一本の書き賃が、今の人が聞いても信じられぬ程に安く、僅に一銭であつた、併かし翁の精力は、この労働に傾注し居られず興宗寺の本堂の襖に鳳凰の大作を成した、これこそ、翁が美の神前に、血肉をくだいて捧げた、見事な捧物であつた。

×

ふみにじられた野草も、来ん春の一茎のさ、かな花を志して力強い根を張る、翁はこの雌伏時代に於て、土佐、大和絵を経狩野から唐宋の古きに及び、結局岩佐勝以あたりの、初期肉筆浮世絵の玉醇に帰り、天平藤原期の仏画の研討が、今日の翁の芸術の構成に、多大の寄与があつたと見てよいやうである。

翁の作品には、最初十四月と落款したが、早瀬来山の門に入つて青峰の号をもらつて、之を用ゐた。

×

明治廿七年翁は時の内務次官松平直男の紹介により、福井県知事関新吾氏の依頼により、其所蔵にかゝる、菱川師信の筆になれる絵巻物を模写したが、翁にとつては、得意の壇場であつたから、縦横に自己の天分を傾注し、福井の菱川師信であるといふので、菱川師福(よし)といふ画号が与へられ関知事等の発起で、福井の風月楼に於いて、花々しい披露宴が催され爾後菱川師福を称するにいたつた。

永平寺の森田悟由禅師は、翁に送るに佳嶽堂の名を以てし、翁の芸術に多大の共鳴を払つたのも、この前後のことであつた。

×

明治廿八年の春翁は、北陸線が敦賀まで開通した頃、もと福井藩士であつた、奥山美政といふ人が東京に居住して居るのを頼つて上京した。

奥山氏は市村座の金方であつたが、その勧誘によつて、市村座の為に吉例曾我の大磯の虎の図を揮毫して、非常に賞讃されたのであつた、当時東京には尾形月耕、小堀鞆音、松本楓湖の諸大家が画壇の雄将と称せられて居たが、翁はこの諸星と交遊して、其位置を占有すべき機会を与へられたのであつたが、翁のまけじ魂と、自己の芸術に対する自信とに、終に東都の画壇に見きりをつけて、居ること三年、帰去来を口すさびながら再び、福井に帰つて来た。

然かし福井の地は、翁が芸術を以て立つには、あまりに土地が小さい、郷土の人々は、翁の芸術を鑑賞する以前に、翁の放

縦を批評し、翁の素行に批難の矢を放つた、福井は郷土の自然が生んだ、この一芸術を納る、には、あまりに偏狭であり、あまりにも無関心であった。

×

うつ力はねかへす力、金と石と相うてば火花が散る、翁の旅画師生活はこゝに始まつた、翁は童顔に笑みをた、へ、白髯をしごきつ、絵を画きに来いと懇望されて十日間位と思つて出かけて行くといふあたりからあと頼まれるものがあるので、十日が一ヶ月となり一月が一年となり、二年三年と永くなつて行きましたといつて居るが、其處に如何にも絵師らしい心持が出て居ると思ふ。

×

翁には二男三女がある、長男は故吉川靈華氏の門下で、平林清輝と称し、二女琴房は家にあつて頼齡の父を補けて、自己を空うして父の芸術を大成すべく核下の捨石に甘んじてゐる、恐らく翁百年の後、其衣鉢をつぐものは琴房女史であらふと思はる、。

×

記者は猶ほ翁の作品に就いて、今一回読者諸君の一燦を煩はしたい。

(下)

浮世絵の取扱ふ対象は、静物でなく動体である。菱川師福翁の作品の主題は、いつも動体を中心としたもので、山水樹木は只主題説明の御そへものに過ぎない、絵の中心点は動く人間であり、鳥獣である。其活躍ぶりの如何を以て、翁の主題に対す

る感情を、表現することにとめて居る。時には人間の手足の運びにも、随分無理な点があるが、其無理なところに生々した命をふき込むのに、翁は非凡の手腕を發揮するのである。

×

新しい洋画家が、馬の動きを現はす為に、幾十かの足をくりつけ、車の動きを現はす為に、何十本の矢をかく不自然さをしないでも、翁の不自然な一線でもつて一瞬毎に幾十の足、幾十本の矢の動きを見事に説明して、自然な落つきを見せて居る、翁の線の不自然さは、寧ろ自然の落着を示して居るのだから、文句をいふものは半可通の世まい言に過ぎないのである。

×

元祿時代の菱川師宣、宝暦の長春、豊国といひ、歌麿といひ、浮世絵の妙手であることは、今更事新らしくいふまでもないが、今は更に新らしい意味をもつものとなつた。といふのは時代風俗の説明に伴ふ、歴史的価値である。

菱川師福翁の八十八年の過去を省みて年僅に四才にして彩管に親しみ、目にふる、ものを、凡て絵にした翁の一生、それ自体が、徳川時代の末期から、明治時代にかけての生きた歴史である。

殊に政治史の資料は、求むるに困難な点は少ないが、風俗史に至つては史料至つて少なく、これに関する文献の涉獵に、研究家は頗る頭を悩まして居る折柄、翁のかきためた下絵翁の頭脳に収められた材料は、今日に於ては頗る貴重なものである。

×

その一例として、過日福井図書館に於て開かれた、橘曙覧翁の遺墨展覧会に於て、翁の筆になつた曙覧翁の風貌である。翁は曙覧翁の尙事時代に、其寺子となつて、文字を習つたもので

あるが、遺墨展覧会の開催を聞き、自分の思ひ出をたどり、幾十もの似顔を書き試み、其最も似たと信ずるものにより、曙覧翁がいつも着て居つた合羽々織ぬの子は小紋が浅黄木綿であつたこと、さし肩で首を前につき出して居たこと、風呂敷だけは唐更紗であつた事等を、八十八才の高齡に似ず、熱心と非常の精力を傾注して書き上げたものであつた。

かくして翁の作品が、曙覧翁の風貌を伝ふる、動かすことの出来ないものを後世にのこすこと、なつたのである。

×

翁は今度更に終生の一事業として、福井の年中行事を絵巻物としてのこしたい、と努力して居るのであるが、左眼は既に明を失し、只右眼をたどつて、日々自己の芸術に精進し、日没に至れば肩も腰もいたむといひつゝも、朝になると更に新らしい元氣をもつて、更に其努力をつゞくること、実に涙ぐましくも見らるゝのである。

翁の大作は馬威しの絵屏風六曲一双である、前号の挿図は其一部を写したものであつて、福井市乾下町加藤佳一氏所蔵にかゝるものである、忠見慶造氏の解説によると

此屏風の一隻には、足羽川にかゝれる九十九橋と其上流の組船の渡（今の幸橋の所在地）とを隔て、南愛宕山の全景を、明細に描き出されたり、其景あまりに現状と変りたれば、一見直に隔世の思を懐かしむ、先づ山上には足羽大神の社殿、尊く建立あらせられ、右に下りて愛宕権現、中央に人麿社、左には継体天皇の石碑立ち立り、それより下りて寿命院の塔、其右に正玄院天満宮等あり、其間古松老杉参差して社殿の間を点綴し、いと神々しく挿せられたり。（中略）

×

（前承）九十九橋は、柴田勝家公の時、石山の石材を取寄せ、元八幡町に石橋を架けたりしを、松平藩に至り、駒屋の地所に移し、自然川幅広くなるにつれ、石橋につぐに木材を以てせり、斯様に木石半々に組合せれば洪水の時流失すること往々あれども、石造の部分は、猶近年まで遺存せり、橋成り架換橋と名つけ、後九十九橋と改む。上流の組船の渡も、福井城の要害として、殊更橋とはせざりきとなん、福井藩の名物馬威の起原は、昔戦場にて、勝馬の往来する時、俄に起る砲聲戦火に、聞き恐れ驚き戦きて、駈引不便なる處より、思はぬ不覚を取ることありしを、いかでか其癖を矯めんと、特に藩主の始められたる、一種の訓練競技なり、屏風にはその実況を心ゆくばかり綿密に描き出されたり云々

×

翁は自分の記憶にのこる安政六年正月十四日の行事を写せしものにて、翁の語る處によれば、福井の馬威は日本国中に類なき行事にして、藩の誇りの第一に数へられしものにて、馬を威せしは、十四日一日なり、この日は殆んど越前国内の人々は、相携へて四方より見物に出懸け、城下の群衆と賑ひはたとうるものなく、百姓の中の元氣もの若者は今日ばかりは、御侍さんをやまらし、かねての高慢の鼻をへし折らんと、未明より城下に押しかくるなり、其日は当時町方の年中行事としての左義長、太鼓小屋等各町に設けられて子供の遊樂の場所となつて居た。

馬威しは卯の上刻先登本隊の二隊に分れ、目ばゆきばり、緋威の鎧兜をいたゞきたる、家中の重臣の子弟が、其郎等に擁せ

られて、美々しく出て立ち、余興風の御寒鱈の催しもある、この隊は神明神社前より徐々に打ち出て、桜門前を本町の方へ進み行く、本隊は藩中の馬術の達人を騎士として出て立つのである。

紅葉本多邸の前から、桜門に至るの間の大広場には、国内の百姓の何人たるを問はず、今日こそ侍に一泡吹かせんと、本隊の来着を待つのである。

やがて本隊の進み来るを見て、多くの勢力は、一せいの鬨の聲を上げ、潮の寄する如き勢にて、馬前に肉薄するのであるが、皆懐手して手を出すことが出来ぬことになつて居るから、勢子は一せいに肩で馬をせぐ、どらを鳴すもの竹ほらを吹くもの、馬の眼の前に采旗をひらめかすもの等、馬の進路をもとの道へと、せきかへさんとするのである。

九十九橋大木戸門の手前、昔からの福井の藩の札元、荒木駒屋の両家の前に至れば、勢子は勝敗の分岐点、こゝを先途とせき止むるのである、騎士が一定の区域内に於て、定められた出発点から到着点に達し、直に引帰し、もとの出発点に帰れば勝利であるが、何としても行手に進み行くことが出来ないものは、横道にそれて、勢子を避けるのである、中には進退きはまり、馬上より高く隻手を指上げて、降を請ふのである、さすれば十重二十重にとりまきし勢子も、さつと道路を開いて、通してやるのであるが、其頃斬捨御免の武士を、あやまらしたといふ痛快さは百姓町人が何事にもかへ難き、快心の事であつたのである。

×
この翁の馬威は、嘗て台覧に供せられた、名譽のものである、

其外松平侯爵の為に揮毫した、出雲お国歌舞之図、出雲路本山毫攝寺の梧桐鳳凰図、金地日本立大襖、高島仲右衛門氏の年中行事図、名古屋仲区永昌寺の涅槃像、永平寺悟由禪師の為に描いた「達摩図」大阪に開催された第三回内国博覧会に出品した、前田隆礼中將の家什となつた「廓子儀」の図等である。

×
翁の遺鉢をつくべき、ともえ子も、今秋福井商品陳列所内、福井県工芸美術展覧会に、慈母観音を出陳して、推賞されたのは、まだ読者の記憶に新たる所であらうから、こゝに贅言を費さない。

（『福井評論』第八卷第十、十二号 昭和七年十一月）
福井評論社

菱川師福

天井陸三

名は小倉儀平といひ、福井の三橋に住んでゐた。藩士西尾家の分れて同苗仁左衛門の第六男に生れた。母親の胎内に宿ること十四ヶ月だつたので四月と名づけられたが一名豊吉といひ豊さんと呼ばれた。四歳の時に父親に別れ、母の手に哺育されたが、その頃より絵をよくし、人々より其の画才を認められて居つた。兄は絵を描くことに反感をいだき時々大変な折檻をしたが、いたづら書も次第に上達し、親しい人々は親兄弟に絵師になることを勧めるので次第に、いたづら書もやかましく言はな

くなり七歳の頃には翫具屋から玩具の彩色等を頼まれて相当の収入を得、家計の一部をたすけるに役立つに至った。十歳の時には店先で紙鳶の絵を描いてゐたが通りかゝる熊谷小右衛門の若黨に認められ熊谷小右衛門よりは結構な品々を戴いた。十二歳の時には西本願寺の別院が新築になり、襖、欄間の画を描きに行つたが、その頃の大工の手間は一日二夕で犬のついた札で支払はれたが豊さんのは一日五夕で羊の札であつたといふ。福井藩の御僧師来山先生について本格の絵を習つたのは、その後のことであり、その後内務次官であつた福井の松平正直男の推挽を受けたが福井県知事関新吾氏の所蔵された菱川師宣筆の絵巻物を臨模したのが縁となり豊さんは、その技倆を認められ、福井の菱川師宣であると評され、関知事はその名付親として風月楼で花々しく披露の宴を張り推しも推されもせぬ土佐派の巨匠としての地歩を占めるに至つた。翁の画風は土佐派の筆法を土台とし、独特の新機軸をもつて密画として類無き手腕を示した。翁の大作は福井藩の年中行事として有名な馬威であつたが、今上陛下の摂政宮として北陸に行啓ありし際は新規に揮毫せしものを台覧に供せられた。翁が八十五歳の時には乾下町八十三、加藤佳一氏の依頼を受けて揮毫した一隻の屏風は、片双に足羽山と九十九橋を背景にし、三球打の実況を、他の片隻には家中のその日の状況を描くもので結構頗る雄大なるのみならず、当時の状況を知ることが出来る。尚此の屏風につき馬威の由来を忠見慶造氏が書き残されしものは見るべき価値あるものである。その他、松平家所蔵の「秀康公がお国舞伎を見るの図」は壮年時代の作であり、大武玄夫氏の所蔵にかゝる「大奥女中花見の図」は花を中心とした当時の行楽をあます所無く画中に収

めたものである。翁の一生は実に数奇を極めたものであるが、その密画は米国に輸出されて非常に賞讃を博し更に沢山の注文があつたので多くの助手を使つてこれを送つた處が、すつかり戻つてきて経済的に苦しい立場に立つたこともあつたといふ。伊藤博文公が政友会創立の際、福井に来られし時は翁の一卷の絵巻物を送つて非常に喜ばれ、その返礼として公の筆になつた軸をもらひ、末松謙澄子等の知遇も受けたといはる。翁は性来淡寡欲赤貧洗ふが如く時に絵絹を買ふに困ることもあつた。名古屋に居寓した時は大洲の其の旅館（現大洲市）のために韓信股くぐりの大衝立を揮毫して以来その旅館は大繁昌したので由来翁が名古屋に行く度毎に非常に好遇されたといふ。翁は近來眼を悪くし、大野の篠座神社に参籠して次第にその視力を回復し謝恩のため大國主像を揮毫して献することになつてゐると。最近筆は益々さへ、福井市日ノ出下町四十八番地の自宅にありて尚画道に精進し余生を楽しんで居られると言ふ。本年（昭和十年）九十歳。

（『郷土研究』第二号 昭和十年九月三十日
福井県福井師範学校）

解説

早瀬来山

名は鴻、字は子漸。幼名を獻橘といい、晩翠、嫩僊、二石齊などと号し、晩年、来山に改めた。文化五年（一八〇八）福井に生まれ、はじめ画を父蘭川に学び、のち京都の松村景文・岡本豊彦等に師事した。豊彦は、来山の非凡な画才を愛し嗣子にしようとしたが、父蘭川は病弱の理由でこれを辞退した。帰郷後、絵を業とし、西御堂（西別院）白書院の襖絵「孔雀の図」「虎の図」などを残した。明治二十三年（一八九〇）二月五日、八十三歳で歿す。

菱川師福は十代の頃、来山に師事し、四条派の正統を修めた。画号「青峰」は、来山より贈られたものである（『福井評論』第八卷第十一号 昭和七年・福井評論社）。

- ①支那賢人図 紙本著色 一幅
落款に「七十九翁 来山」とある。明治十九年（一八八六）の作品。

- ②韓信股くぐり図 紙本著色 一幅
福井市春嶽公記念文庫蔵

- ③支那武将図 紙本著色 一幅
一五・二×二八・五 福井市春嶽公記念文庫蔵

菱川師福

- ④曳馬図絵馬 杉板著色 一額

表に「奉納 青峰（印）」、裏に「寄進 神崎屋儀兵衛 慶應三年卯六月中旬 年廿三歳」とあり、列品中、最初期のものである。松岡の荒物屋、小倉勘左衛門（文化五〜明治十五）の婿養子となったのは、この前年のことである（『福井評論』第八卷第十号 昭和七年・福井評論社）。「神崎屋」とは、妻の実家平林家の屋号である。

松岡町には本絵馬のほか、薬師神社（薬師一）に、「画工小倉儀平謹画」と記された某氏奉納の曳馬図絵馬（明治二十四年）や、二番目の妻説との子、正利（菱川正俊）・諭吏治（平林清輝）の筆になる絵馬がある。詳細は『松岡の絵馬』（昭和五十九年・松岡町教育委員会）参照。

- ⑤岩上鷹図 紙本墨画淡彩 一幅
右上に「明治三年庚六月吉日是ヲカキ 松岡神崎屋儀兵衛平筆」とある。二十六歳の作品。

- ⑥雉図 紙本著色 一幅
左下に「明治七年二月 神崎屋儀平是ヲ書」とある。三十三歳の作品。

- ⑦雉図下絵 紙本白描 一幅
中央下に「明治七年二月是ヲ書 神崎屋義平」とある。

- ④〜⑦は、いずれも養子先の松岡で、家業に専念していた頃の作品である。

- ⑧十六羅漢図下絵 紙本淡彩 双幅

(右幅) 右下に「明治廿五年八月二日 小蝶楼十四月筆 俗名小倉儀平 三幅対 謹テ是ヲ書」、(左幅) 左上に「明治廿五年八月三日 十六羅漢式福対 福井ニ於テ 小蝶楼十四月謹テ是ヲ書 行年 翁」とある。四十八歳の作品。

養子先、松岡での生活は二十数年に及んだが、絵に対する執念断ちがたく、一大決心の末、画家として再出発したのはこの頃である。即ち、妻や子を松岡に残し、一人福井(江戸下町三六番七)へ出て画業に専念することとなった。一方、残された家族は、師福(儀平)の実家から傘・提灯の製法を習い、正利や諭吏治鱗が上絵を描いて販売し、家計を助けたという―平林きみを氏談(『菱川師福展』昭和四十九年・松岡町教育委員会)。

なお、本図に見られる「十四月」の由来について師福は、
④(馬威図献上に付披露挨拶状)の中で「十四ヶ月母体ニ在リシノ故ヲ以テ名ヲ四月ト称へ」と述べている。

一一一・〇×五〇・五

菱川師福翁記念文庫蔵

⑨浮世画盆踊図下絵 紙本淡彩

一幅

左上に「七月□ 明治廿八年五月十五日是ヲ書 十四月筆

浮世画盆踊図」とある。五十一歳の作品。

七二・八×四二・四

菱川師福翁記念文庫蔵

⑩兒普賢菩薩図下絵 紙本白描

一幅

左上に「兒普賢菩薩 明治廿八年二月是ヲ書 十四月筆」とある。

とある。

八四・八×四五・八

菱川師福翁記念文庫蔵

⑪玄奘三蔵図下絵 紙本白描

一幅

左上に「明治廿九年十一月是ヲ書 日本美術協会全廿八年

春季展覧会出品唐人ノ筆玄奘三蔵像写 参考品 十四月下書」とあり、某中国画家の作品を臨写したものの下絵である。

九〇・二×四二・〇

菱川師福翁記念文庫蔵

⑫正観世音菩薩図下絵 紙本白描

一枚

右上に「明治廿九年十二月是ヲ書 正観世音菩薩 十四月筆」とある。五十二歳の作品。

三五・五×二三・四

菱川師福翁記念文庫蔵

⑬劉伯倫図下絵 紙本墨画淡彩

一幅

右上に「明治三十四年八月日百幅会ニ付下図之 賛成員 歩兵第十六連隊長・陸軍歩兵大佐正六位勲三等 功四級三原重雄殿依頼 菱川師福筆」とある。五十七歳の作品。

明治三十二年、県知事関新吾より「菱川師福」の画号を贈

られ、その二年後には、師福を支援する福井県絵画奨励会(百幅会・④参照)が結成されるなど、ようやく画家としての地歩を占めるに至った。本図は、百幅会賛助者の一人、三原重雄(鯖江歩兵第三十六連隊長 明治三十七年八月二十七日、日露戦争により戦死)の依頼によって描いた作品の下絵で、「十六連隊」とあるのは誤記である。

劉伯倫(劉伶)は、中国六朝時代、晋の人(三世紀頃)で、本図は、一壺酒を携え、人をして鍤すきを荷かかって随まわらせ、「我死すなわなば便すなわち我を埋めよ」と言ったという故事を描いている。

一五一・〇×九三・〇

菱川師福翁記念文庫蔵

⑭支那人物図下絵 紙本墨画

一幅

左下に「明治卅五年一月卅日 菱川師福是ヲ書」とある。

五十八歳の作品。

一六三・八×八六・八

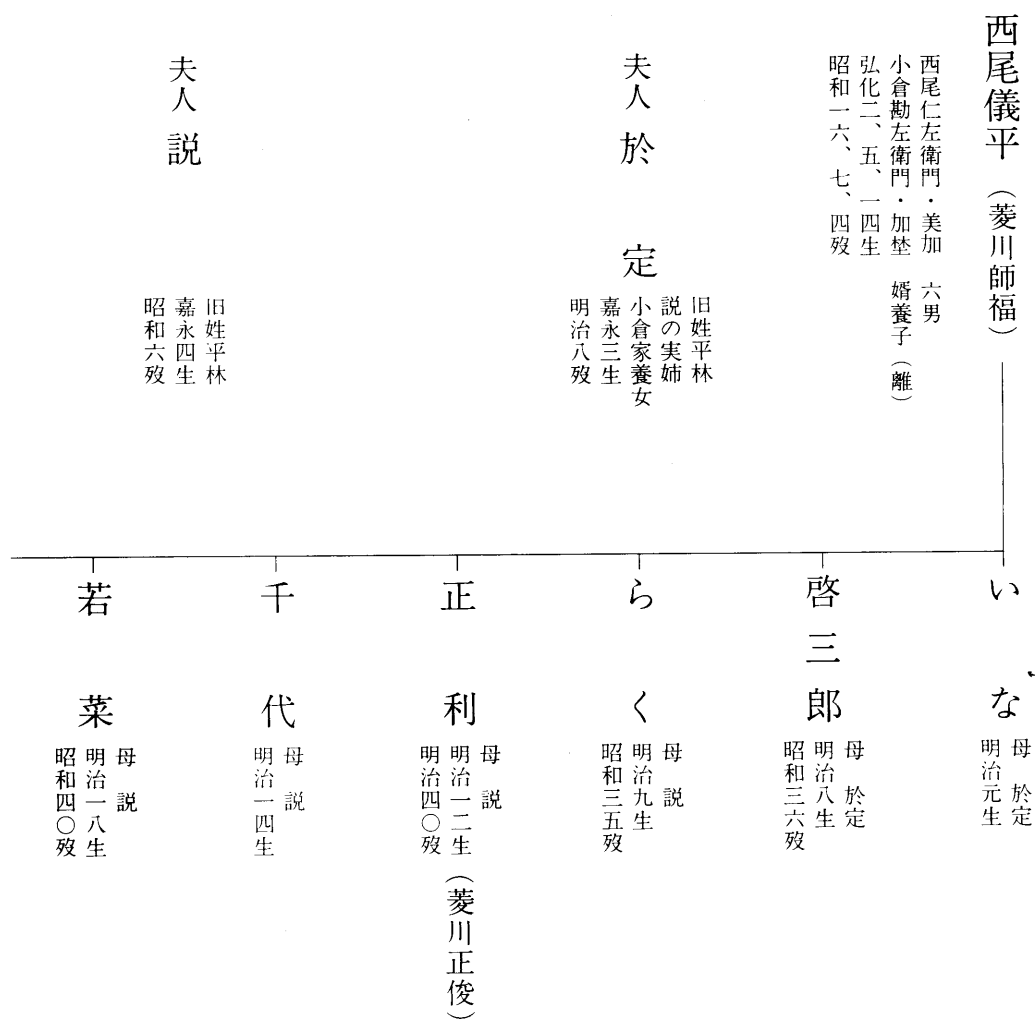
菱川師福翁記念文庫蔵

• • • •
解 資 略 略

年 系

説 料 譜 図

略系図



夫人や

な

旧姓後出
明治二生
大正三歿

夫人つ

ね

旧姓松嶋
明治二〇生
昭和一九歿

諭吏治艫

母説
明治二一生
昭和三八歿
(平林清輝)

静

母やな
明治二五生
明治三七歿

琴

房

母やな
明治二八生
昭和二九歿
(菱川土萌)

美

香

母やな
明治三二生
明治四三歿

初

音

母やな
明治四〇生

松太郎

母つね
明治四一生

略年譜

年代	年齢	事蹟
弘化 二(一八四五)	一	<p>○五月一日、福井上三ツ橋長連寺向(現、福井市照手二丁目二)に生まれる。父西尾仁左衛門(傘・提灯製造業——現、ねこせや)、母美加、六男。名は儀平、幼名は十四月・豊吉。</p> <p>○幼少の頃、歌人橋曙覧の藁屋(現、福井市照手二丁目五―一三)に通い、手習をうける。</p> <p>○西御堂(西別院 現、福井市松本四丁目九―二一)の再建に際し、襖・欄間・格天井の画を揮毫。手間賃、一日五匁。</p> <p>○その後、福井の絵師早瀬来山(文化五〇明治二三)に師事し、四条派の正統を学ぶ。来山より画号「青峰」を贈られる。</p> <p>○吉田郡松岡村窪(現、松岡町薬師二)の士族、小倉勘左衛門(荒物屋)・加埜の婿養子となる。妻(名は於定)は神崎屋と称した平林家(薬師二)の娘で、小倉家養女。</p> <p>○夫人病歿(享年二八)、説(亡妻の妹)と結婚。</p> <p>○六月六日、離縁。</p> <p>○二月二七日、画業に転じる決意を固め、福井市江戸下町三六番七へ転居。</p> <p>○三月、やな(三番目の妻)と同居。</p> <p>○春、旧福井藩士奥山美政を頼って上京(三年間)、歌舞伎劇場市村座(江戸三座の一つ、昭和七年焼失)で「吉例曾我の大磯の虎の図」を揮毫。</p> <p>○一月二五日、福井県知事関新吾より画号「菱川師福」を贈られ、福井の風月楼に於いて披露宴が催される。</p> <p>○この頃、曹洞宗大本山永平寺六四世、森田悟由禅師より画号「佳嶽堂」を贈られる。</p> <p>○地元福井の有志を中心に、師福の絵画奨励会が結成される(日露戦争により中絶)。</p> <p>○大阪市天王寺で開催された、第五回内国勸業博覧会(三月一日―七月三十一)に「廓子儀図」</p>
安政 三(一八五六)	二	
慶応 二(一八六六)	二二	
明治 八(一八七五)	三一	
一二(一八七九)	三五	
二五(一八九二)	四八	
二八(一八九五)	五一	
三二(一八九九)	五五	
三四(一九〇一)	五七	
三六(一九〇三)	五九	

四〇（一九〇七）	六三	を出品。作品は陸軍中将前田隆禮（男爵）の家什となる。
四一（一九〇八）	六四	〇一月一日、福井市宝永小学校で開催された北陸臨池会に於いて、絵画揮毫会を開く。
四四（一九一一）	六七	〇一月七日、旧姓「西尾」に復し、やまと結婚。
大正 元（一九一二）	六八	〇この頃、福井市宝永上町四二番地（現、宝永四丁目八）神明神社境内に居住。
		〇八月、自ら美術寮・百幅会の設立を発起し、事務局を福井市尾上下町（現、宝永三丁目三五）竹沢市郎平宅に置く。
		〇親鸞上人御遠忌六五〇年を迎えるにあたり、浄土真宗出雲路派本山、毫撰寺（武生市清水頭町二一九）の襖絵「梧桐鳳凰図」・壁画・天井絵（花卉・野菜 四九五枚）を揮毫。
		〇四月二六日、福井市豊島上町一〇七番二へ転居。家主は諸田甚平。家賃、月六円。
		〇自らの墓を建てる（費用一二円。福井市足羽山の西墓地公園内、興宗寺墓域に現存）。
		〇五月三〇日、六女琴房（菱川土萌・母やな）に家督を譲り、分家独立。
		〇九月一日、福井市日ノ出下町四八番地（現、日之出二丁目七）へ転居。松平家貸地一一八坪五合（表一一間五分、裏二二間二分、奥行一〇間）。家賃、月二円三七銭。
		〇三月六日、夫人歿（享年四六）。
		〇五月、つね（四番目の妻）と同居。
		〇二月二一日つねと結婚。
		〇五月、愛知県知多郡岡田町（現、知多市岡田）の煉瓦工場主、安島重盛の世話で岡田町薬師前（字上中田）に滞在。
		〇晩年、松嶋松太郎（つねの連子。師福の勧めで常滑陶器学校に入学、陶工として活躍）の住む愛知県知多郡常滑町北条（現、常滑市原松町）と福井とを度々往復し、作家活動を続ける。
		〇一月八日、皇太子殿下福井行啓。「旧藩士馬威図」三枚一組を献上し、採納の栄に浴す。
		〇名古屋市中区矢場町、曹洞宗永昌院（現、中区松原二丁目に所在）の依頼により涅槃図を揮毫。
		〇今立郡今立町栗田部、岡太神社へ奉納の「菜祀図屏風」を揮毫。
		〇福井市葵町（現、みのり一丁目）の豪商、片山外吉の依頼により「馬威図屏風」を揮毫。
		〇七月四日、愛知県知多郡常滑町瀬木（現、常滑市瀬木町）で歿す。墓は北条の区有墓地に現存。
昭和一〇（一九三五）	八一	
昭和一〇（一九三五）	九一	
昭和一〇（一九三七）	九三	
昭和一〇（一九四一）	九七	
一三（一九二四）	八〇	
一四（一九二五）	八一	
一五（一九二五）	九一	
一六（一九四一）	九七	

資 料

米寿を迎へた菱川師福画伯の事ども

禿 山 樵 夫

(上)

菱川師福翁は弘化二年五月、福井三ツ橋の質屋西尾仁左衛門の第六男に生れた、母みかゞ翁をみこもつて、十四ヶ月目に生れたといふので、幼名をトヨキ四月と呼んだが、皆が豊さんと呼んだのであつた、父仁左衛門は若くして死し、母みかゞ六人の遺孤を擁し、次第に家道振はず、一家没落の悲運に遭遇した。

翁は自然生えの画師で四才の時鼠の柵落しの絵を画き、見るものから、其の画才をたへられたが紙と筆さへあてがへば、何かなし思ひつき次第に書きちらし、それが画になつた、しかし紙一枚二文するその頃、産を傾けた西尾の家にとつては、二文は中々重く、紙は自由に得られない、或る時障子紙のめくりを、さがし出していたづら書きをし、兄から手ひどい折檻を受けたこと等もあつた。

翁は五六歳前後から、寺小屋に通ひましたが、それが橘曙覧翁の塾で曙覧翁の嗣子今滋先生に教へを受けたが、翁は手にあまる腕白もので、いつも手習をよそに、草紙の白い處に画を書いて、先生からいつも叱られたといふことである、時々おかあさんのいひつけで塩町に塩味噌をかひに行くと、朋輩が

十四月どこへ行く味噌かいに

いふてくれるな恥かしや

とはやしたてるので、まけじたましいの翁は、愛犬をけしかけ、相手を泣かせたりしたものである、かくてこの寺小屋でも持てあまし、どこでも体よくことわられたといふことである。

×

次第に不如意になつた西尾家の子供達は、皆それ／＼働かねばならなくなつた、昔から芸が身をたすくる不仕合せといふが、翁の手業は一かど役に立ち、子供の紙鳶の絵や、行燈、絵傘から下駄の表、玩具の絵等を書いて一かど家計を助けたのであつた。

翁には未知の師があつた、その頃江戸の民衆に歓迎された江戸絵、豊国芳あたりの江戸絵が、土産物として持帰られ、屏風の貼交ぜ等に用ゐてあつたのに翁は極度の興奮と憧憬をもつて、其芸術の生命をつかんだ、この江戸絵こそ、自然生えの翁の芸術を陶冶する、師匠でもあり心の友でもあつた。

翁が多くの日本画家が、題材として取扱つた静物よりも、より多く生物に引つけられる、素地を作つたことは、疑もなき事実である。

×

十二才の時西本願寺別院の修理に柱の金欄卷、格天井の彩色画をかいたが、其頃大工手間が一日二匁の犬の札であつたが、翁は五匁の羊の札をもらつたといふことである、其後五分市の毫攝寺でも同様な仕事をし、其所縁によつて、同寺の作品となつて居る、同寺の乳母のえが野猪と格闘せる図は、翁の筆になつたといふことである。

此後翁は、福井藩の御絵師早瀬来山の門に入つて、四條派の

正統を学んだ。

× 来山名は鴻字は子漸、父蘭川の業を継ぎ、京都に遊び松村景文岡元豊彦等に就て画を習つた、豊彦来山の画才あるを見て、養つて嗣子となさんとしたが、父蘭川は来山が大家のあとを嗣ぐことを望まないことはなかつたが、来山は蒲柳の質であるので之を辞した、後福井に帰り画を業とした。

× 次子和三郎雲峰と号し、又松石といひ画才があつた、福井東別院対面所の張付壁画、大舜耕作の図は松石の意匠になり、其逝去後來山によつて完成されたのであつた、西別院白書院の襖の孔雀の絵は、来山は四條流の正統を伝へ、其筆になつたものである、来山は花鳥人物山水と画境も広く、其画は相当品位と風格を備へたものである、資性温厚にして円満な人柄であつた、六十才以後には右手が慄へ筆を取る事が稀れであつて明治廿三年二月五日八十三歳で筆を易へた。

× 来山は師福の画才を認め、松石なきあとの、早瀬家の嗣子たらんことを望んだが、師福の芸術も其の性格も、象牙の塔中に因はるるには、あまりに奔放であり、圭角もあつた、師福にして若し早瀬家の人となつても、来山の四條派の流統の型にはまつた、くびきをかけらる、ことを喜ばないだらうし四條派から出た、円山芸術が師福のねらふ画材に相似点があるにしても、その表現とこれを取扱ふ感情に於て、全然相容れぬものがあると思ふ。

× 然かし師福翁の大成した芸術には、四條派の感化が多かつた

ことは、否めないようである。

× 先年故人となつた吉川靈華画伯は、師福翁の画を取て、四條から出た画だと評したといふことによつても、来山の感化は相当大きかつたものと思はる、

師福翁は筆をとれば人物を絵き画想を練つて、過去に此題材を求むれば、直にその物語となる、好んで人物を画き、人物を中心とした一幅の画に社会百般の風俗を描写し、人情を説明することが筆の芸術境であり、此人生觀であることが、丁度大和絵の絵師や浮世絵師と、其歩調を一にしてゐる。

× 日本画の鑑賞は、因襲的な山水風景、或は花鳥に遍して、風俗画を卑近なものとし、軽んじた風があつた、風俗画は江戸の民衆によつて、初めて鑑賞価値が発見せられ、大衆向きに肉筆よりも版画として、大量生産の必要を生じ錦絵として発達したものであつて、其発達にもなつて、一部の浮世絵師は、僅に生活の苦難から脱し得たものであつたらうが、葛飾北斎の如く、軒軻不遇、閭巷に窮死するものさへあつた、まして、草深い田舎住ひの画師である師福翁は、生活に苦しみぬいたが、翁のまけたまはしいと、自然兒としての誇持は幼少時代に、江戸絵豊国国芳等によつて得た、感激と憧憬を胸にいだきしめて、自分の信ずる芸術境に突進した勇氣と自信とは、我等の推奨しなればならぬ点だと思ふ。

× そふこふする中に、あの王政維新の波瀾は、芸術等といふものを社会の底にうづめてしまつて、画家、彫刻家等の受難時代が来た、如何に強情我慢の師福翁と雖も、雌伏を余儀なくされ、慶応二年吉田郡松岡の荒物屋小倉儀平の養子となり、絵画の生

活より遠ざかること、なつた。

(中)

小倉の家は、米、糸、菜種、苘蓆などを商つて居たが、養父の死後、芸術家肌の翁の商法は、失敗が多くやはり彩管を手にして立つことが其天分であり、ふさはしい生活でもあつた、かくて翁は福井に帰り、画家として再生した。

明治廿年以後は、維新の変革にともなう、人心の動搖は較落つき美術工芸の復興時代に入つたけれども、其恩沢は田舎住ひの翁に及ぶに至らなかつた。

この時代は、翁の雌伏時代でもあり、自らを養ふ時代でもあつた各旧家の所蔵になる古名画や、寺院の古仏画の模写にこれ日も足らず、自己の興味に即した画境から歩一步研究に没頭すべき、よき機会が与へられたのであつた。

其頃の翁の窮乏は、北齋や草雲等のそれに比すべきものがあつた翁は米塩の資を得る為に、涼み提灯の絵、傘の絵まで画いた、傘一本の書き賃が、今の人が聞いても信じられぬ程に安く、僅に一銭であつた、併かし翁の精力は、この労働に傾注し居られず興宗寺の本堂の襖に鳳凰の大作を成した、これこそ、翁が美の神前に、血肉をくだいて捧げた、見事な捧物であつた。

×

ふみにじられた野草も、来ん春の一茎のさ、かな花を志して力強い根を張る、翁はこの雌伏時代に於て、土佐、大和絵を経狩野から唐宋の古きに及び、結局岩佐勝以あたりの、初期肉筆浮世絵の玉醇に帰り、天平藤原期の仏画の研討が、今日の翁の芸術の構成に、多大の寄与があつたと見てよいやうである。

翁の作品には、最初四月と落款したが、早瀬来山の門に入つて青峰の号をもらつて、之を用ゐた。

×

明治廿七年翁は時の内務次官松平直男の紹介により、福井県知事関新吾氏の依頼により、其所蔵にかゝる、菱川師信の筆になれる絵巻物を模写したが、翁にとつては、得意の壇場であつたから、縦横に自己の天分を傾注し、福井の菱川師信であるといふので、菱川師福(よし)といふ画号が与へられ関知事等の発起で、福井の風月楼に於いて、花々しい披露宴が催され爾後菱川師福を称するにいたつた。

永平寺の森田悟由禅師は、翁に送るに佳嶽堂の名を以てし、翁の芸術に多大の共鳴を払つたのも、この前後のことであつた。

×

明治廿八年の春翁は、北陸線が敦賀まで開通した頃、もと福井藩士であつた、奥山美政といふ人が東京に居住して居るのを頼つて上京した。

奥山氏は市村座の金方であつたが、その勧誘によつて、市村座の為に吉例會我の大磯の虎の図を揮毫して、非常に賞讃されたのであつた、当時東京には尾形月耕、小堀鞆音、松本楓湖の諸大家が画壇の雄将と称せられて居たが、翁はこの諸星と交遊して、其位置を占有すべき機会を与へられたのであつたが、翁のまけじ魂と、自己の芸術に対する自信とに、終に東都の画壇に見きりをつけて、居ること三年、帰去来を口すさびながら再び、福井に帰つて来た。

然かし福井の地は、翁が芸術を以て立つには、あまりに土地が小さい、郷土の人々は、翁の芸術を鑑賞する以前に、翁の放

縦を批評し、翁の素行に批難の矢を放つた、福井は郷土の自然が生んだ、この一芸術を納るゝには、あまりに偏狭であり、あまりにも無関心であった。

×

うつ力はねかへす力、金と石と相うてば火花が散る、翁の旅画師生活はこゝに始まつた、翁は童顔に笑みをたゝへ、白髯をしごきつゝ、絵を画きに来いと懇望されて十日間位と思つて出かけて行くといふあたりからあとから頼まれるものがあるので、十日が一ヶ月となり一月が一年となり、二年三年と永くなつて行きましたといつて居るが、其處に如何にも絵師らしい心持が出て居ると思ふ。

×

翁には二男三女がある、長男は故吉川靈華氏の門下で、平林清輝と称し、二女琴房は家にあつて頼齡の父を補けて、自己を空うして父の芸術を大成すべく核下の捨石に甘んじてゐる、恐らく翁百年の後、其衣鉢をつぐものは琴房女史であらふと思はるゝ。

×

記者は猶ほ翁の作品に就いて、今一回読者諸君の一燦を煩はしたい。

(下)

浮世絵の取扱ふ対象は、静物でなく動体である。菱川師福翁の作品の主題は、いつも動体を中心としたもので、山水樹木は只主題説明の御そへものに過ぎない、絵の中心点は動く人間であり、鳥獸である。其活躍ぶりの如何を以て、翁の主題に対す

る感情を、表現することにとめて居る。時には人間の手足の運びにも、随分無理な点があるが、其無理なところに生々した命をふき込むのに、翁は非凡の手腕を發揮するのである。

新しい洋画家が、馬の動きを現はす為に、幾十かの足をくゞりつけ、車の動きを現はす為に、何十本かの矢をかく不自然さをしないでも、翁の不自然な一線でもつて一瞬毎に幾十の足幾十本の矢の動きを見事に説明して、自然な落つきを見せて居る、翁の線の不自然さは、寧ろ自然の落つきを示して居るのだから、文句をいふものは半可通の世まい言に過ぎないのである。

×

元祿時代の菱川師宣、宝暦の長春、豊国といひ、歌麿といひ、浮世絵の妙手であることは、今更事新しくいふまでもないが、今は更に新しい意味をもつものとなつた。といふのは時代風俗の説明に伴ふ、歴史的価値である。

菱川師福翁の八十八年の過去を省みて年僅に四才にして彩管に親しみ、目にふるゝものを、凡て絵にした翁の一生、それ自体が、徳川時代の末期から、明治時代にかけての生きた歴史である。

殊に政治史の資料は、求むるに困難な点は少ないが、風俗史に至つては史料至つて少なく、これに関する文献の涉獵に、研究家は頗る頭を悩まして居る折柄、翁のかきためた下絵翁の頭脳に収められた材料は、今日に於ては頗る貴重なものである。

×

その一例として、過日福井図書館に於て開かれた、橘曙覧翁の遺墨展覧会に於て、翁の筆になつた曙覧翁の風貌である。翁は曙覧翁の尙事時代に、其寺子となつて、文字を習つたもので

あるが、遺墨展覧会の開催を聞き、自分の思ひ出をたどり、幾十もの似顔を書き試み、其最も似たと信ずるものにより、曙翁がいつも着て居つた合羽々織ぬの子は小紋が浅黄木綿であつたこと、さし肩で首を前につき出して居たこと、風呂敷だけは唐更紗であつた事等を、八十八才の高齡に似ず、熱心と非常の精力を傾注して書き上げたものであつた。

かくして翁の作品が、曙翁の風貌を伝ふる、動かすことの出来ないものを後世にのこすこと、なつたのである。

×

翁は今度更に終生の一事業として、福井の年中行事を絵巻物としてのこしたい、と努力して居るのであるが、左眼は既に明を失し、只右眼をたどつて、日々自己の芸術に精進し、日没に至れば肩も腰もいたむといひつゝも、朝になると更に新しい元氣をもつて、更に其努力をつゞくこと、実に涙ぐましくも見らるゝのである。

翁の大作は馬威しの絵屏風六曲一双である、前号の挿図は其一部を写したものであつて、福井市乾下町加藤佳一氏所蔵にかゝるものである、忠見慶造氏の解説によると

此屏風の一隻には、足羽川にかゝれる九十九橋と其上流の組船の渡（今の幸橋の所在地）とを隔て、南愛宕山の全景を、明細に描き出されたり、其景あまりに現状と変りたれば、一見直に隔世の思を懐かしむ、先づ山上には足羽大神の社殿、尊く建立あらせられ、右に下りて愛宕権現、中央に人麿社、左には継体天皇の石碑立ち立り、それより下りて寿命院の塔、其右に正玄院天満宮等あり、其間古松老杉参差して社殿の間を点綴し、いと神々しく拝せられたり。（中略）

×

（前承）九十九橋は、柴田勝家公の時、石山の石材を取寄せ、元八幡町に石橋を架けたりしを、松平藩に至り、駒屋の地所に移し、自然川幅広くなるにつれ、石橋につぐに木材を以てせり、斯様に木石半々に組合せれば洪水の時流失すること往々あれども、石造の部分は、猶近年まで遺存せり、橋成り架換橋と名つけ、後九十九橋と改む。上流の組船の渡も、福井城の要害として、殊更橋とはせざりきとなん、福井藩の名物馬威の起原は、昔戦場にて、勝馬の往来する時、俄に起る砲聲戦火に、聞き恐れ驚き戦きて、駈引不便なる處より、思はぬ不覚を取ることありしを、いかでか其癖を矯めんと、特に藩主の始められたる、一種の訓練競技なり、屏風にはその実況を心ゆくばかり綿密に描き出されたり云々

×

翁は自分の記憶にのこる安政六年正月十四日の行事を写せしものにて、翁の語る處によれば、福井の馬威は日本国中に類なき行事にして、藩の誇りの第一に数へられしものにて、馬を威せしは、十四日一日なり、この日は殆んど越前国内の人々は、相携へて四方より見物に出懸け、城下の群衆と賑ひはたとつるものなく、百姓の中の元氣もの若者は今日ばかりは、御侍さんをあやまらし、かねての高慢の鼻をへし折らんと、未明より城下に押しかくるなり、其日は当時町方の年中行事としての左義長、太鼓小屋等各町に設けられて子供の遊樂の場所となつて居た。

馬威しは卯の上刻先登本隊の二隊に分れ、目ばゆきばり、緋威の鎧兜をいたゞきたる、家中の重臣の子弟が、其郎等に擁せ

られて、美々しく出て立ち、余興風の御寒鯉の催しもある、この隊は神明神社前より徐々に打ち出て、桜門前を本町の方へ進み行く、本隊は藩中の馬術の達人を騎士として出て立つのである。

紅葉本多邸の前から、桜門に至るの間の大広場には、国内の百姓の何人たるを問はず、今日こそ侍に一泡吹かせんと、本隊の来着を待つのである。

やがて本隊の進み来るを見て、多くの勢力は、一せいの関の聲を上げ、潮の寄する如き勢にて、馬前に肉薄するのであるが、皆懐手して手を出すことが出来ぬことになつて居るから、勢子は一せいに肩で馬をせぐ、どらを鳴すもの竹ほらを吹くもの、馬の眼の前に采旗をひらめかすもの等、馬の進路をもとの道へと、せきかへさんとするのである。

九十九橋大木戸門の手前、昔からの福井の藩の札元、荒木駒屋の両家の前に至れば、勢子は勝敗の分岐点、こゝを先途とせき止むるのである、騎士が一定の区域内に於て、定められた出発点から到着点に達し、直に引歸し、もとの出発点に帰れば勝利であるが、何としても行手に進み行くことが出来ないものは、横道にそれて、勢子を避けるのである、中には進退きはまり、馬上より高く隻手を指上げて、降を請ふのである、さすれば十重二十重にとりまきし勢子も、さつと道路を開いて、通してやるのであるが、其頃斬捨御免の武士を、あやまらしたといふ痛快さは百姓町人が何事にもかへ難き、快心の事であつたのである。

×

この翁の馬威は、嘗て台覧に供せられた、名譽のものである、

其外松平侯爵の為に揮毫した、出雲お国歌舞之図、出雲路本山毫攝寺の梧桐鳳凰図、金地日本立大襖、高島仲右衛門氏の年行事行事図、名古屋仲区永昌寺の涅槃像、永平寺悟由禅師の為に描いた「達摩図」大阪に開催された第三回内国博覧会に出品した、前田隆礼中将の家什となつた「廓子儀」の図等である。

×

翁の遺鉢をつくべき、ともえ子も、今秋福井商品陳列所内、福井県工芸美術展覧会に、慈母観音を出陳して、推賞されたのは、まだ読者の記憶に新たる所であらうから、こゝに贅言を費さない。

(『福井評論』第八卷第十十二号 昭和七年十一月 福井評論社)

菱川師福

天井陸三

名は小倉儀平といひ、福井の三橋に住んでゐた。藩士西尾家の分れで同苗仁左衛門の第六男に生れた。母親の胎内に宿ること十四ヶ月だったので四月と名づけられたが一名豊吉といひ豊さんと呼ばれた。四歳の時に父親に別れ、母の手に哺育されたが、その頃より絵をよくし、人々より其の画才を認められて居つた。兄は絵を描くことに反感をいだき時々大変な折檻をしたが、いたづら書も次第に上達し、親しい人々は親兄弟に絵師になることを勧めるので次第に、いたづら書もやかましく言はな

くなり七歳の頃には翫具屋から玩具の彩色等を頼まれて相当の収入を得、家計の一部をたすけるに役立つに至つた。十歳の時には店先で紙鳶の絵を描いてゐたが通りかゝる熊谷小右衛門の若黨に認められ熊谷小右衛門よりは結構な品々を戴いた。十二歳の時には西本願寺の別院が新築になり、襖、欄間の画を描きに行つたが、その頃の大工の手間は一日二夕で犬のついた札で支払はれたが豊さんのは一日五夕で羊の札であつたといふ。福井藩の御僧師来山先生について本格の絵を習つたのは、その後のことであり、その後内務次官であつた福井の松平正直男の推挽を受けたが福井県知事関新吾氏の所蔵された菱川師宣筆の絵巻物を臨模したのが縁となり豊さんは、その技倆を認められ福井の菱川師宣であると評され、関知事はその名付親として風月楼で花々しく披露の宴を張り推しも推されもせぬ土佐派の巨匠としての地歩を占めるに至つた。翁の画風は土佐派の筆法を土台とし、独特の新機軸をもつて密画として類無き手腕を示した。翁の大作は福井藩の年中行事として有名な馬威であつたが、今上陛下の摂政宮として北陸に行啓ありし際は新規に揮毫せしものを台覧に供せられた。翁が八十五歳の時には乾下町八十三、加藤佳一氏の依頼を受けて揮毫した一隻の屏風は、片双に足羽山と九十九橋を背景にし、三球打の実況を、他の片隻には家中のその日の状況を描くもので結構頗る雄大なるのみならず、當時の状況を知ることが出来る。尚此の屏風につき馬威の由来を忠見慶造氏が書き残されしものは見るべき価値あるものである。その他、松平家所蔵の「秀康公がお国舞伎を見るの図」は壮年時代の作であり、大武玄夫氏の所蔵にかゝる「大奥女中花見の図」は花を中心とした当時の行楽をあます所無く画中に収

めたものである。翁の一生は実に数奇を極めたものであるが、その密画は米国に輸出されて非常に賞讃を博し更に沢山の注文があつたので多くの助手を使つてこれを送つた處が、すつかり戻つてきて経済的に苦しい立場に立つたこともあつたといふ。伊藤博文公が政友会創立の際、福井に来られし時は翁の一卷の絵巻物を送つて非常に喜ばれ、その返礼として公の筆になつた軸をもらひ、末松謙澄子等の知遇も受けたといはる。翁は性来淡寡欲赤貧洗ふが如く時に絵絹を買ふに困ることもあつた。名古屋に居寓した時は大洲の其の旅館（美濃郡旅館）のために韓信股ぐりの大衝立を揮毫して以来その旅館は大繁昌したので由来翁が名古屋に行く度毎に非常に好遇されたといふ。翁は近來眼を悪くし、大野の篠座神社に参籠して次第にその視力を回復し謝恩のため大國主像を揮毫して献することになつてゐると。最近筆は益々さへ、福井市日ノ出下町四十八番地の自宅にありて尚画道に精進し余生を楽しんで居られると言ふ。本年（昭和十年）九十歳。

（『郷土研究』第二号

昭和十年九月三十日）
福井県福井師範学校

解説

早瀬来山

名は鴻、字は子漸。幼名を獻橘といい、晩翠、嫩僊、二石齊などと号し、晩年、来山に改めた。文化五年（一八〇八）福井に生まれ、はじめ画を父蘭川に学び、のち京都の松村景文・岡本豊彦等に師事した。豊彦は、来山の非凡な画才を愛し嗣子にしようとしたが、父蘭川は病弱の理由でこれを辞退した。帰郷後、絵を業とし、西御堂（西別院）白書院の襖絵「孔雀の図」「虎の図」などを残した。明治二十三年（一八九〇）二月五日、八十三歳で歿す。

菱川師福は十代の頃、来山に師事し、四条派の正統を修めた。画号「青峰」は、来山より贈られたものである（『福井評論』第八卷第十一号 昭和七年・福井評論社）。

①支那賢人図 紙本著色 一幅
落款に「七十九翁 来山」とある。明治十九年（一八八六）の作品。

②韓信股くぐり図 紙本著色 一幅
一三二・八×六〇・二 福井市春嶽公記念文庫蔵

③支那武将図 紙本著色 一幅
一三四・〇×五九・八 福井市春嶽公記念文庫蔵

一一五・二×二八・五 福井市春嶽公記念文庫蔵

菱川師福

④曳馬図絵馬 杉板著色 一額

表に「奉納 青峰（印）」、裏に「寄進 神崎屋儀兵衛 慶應三年卯六月中旬 年廿三歳」とあり、列品中、最初期のものである。松岡の荒物屋、小倉勘左衛門（文化五、明治十五）の婿養子となったのは、この前年のことである（『福井評論』第八卷第十号 昭和七年・福井評論社）。「神崎屋」とは、妻の実家平林家の屋号である。

松岡町には本絵馬のほか、薬師神社（薬師一）に、「画工小倉儀平謹画」と記された某氏奉納の曳馬図絵馬（明治二十四年）や、二番目の妻説との子、正利（菱川正俊）・諭吏治鱸（平林清輝）の筆になる絵馬がある。詳細は『松岡の絵馬』（昭和五十九年・松岡町教育委員会）参照。

⑤岩上鷹図 紙本墨画淡彩 一幅
四一・〇×二六・〇 吉田郡松岡町 明神社蔵

右上に「明治三年六月吉日是ヲカキ 松岡神崎屋儀兵衛平筆」とある。二十六歳の作品。

⑥雉図 紙本著色 一幅
四六・五×三四・〇 菱川師福翁記念文庫蔵

左下に「明治七年二月 神崎屋儀平是ヲ書」とある。三十歳の作品。

⑦雉図下絵 紙本白描 一幅
三八・六×五〇・六 菱川師福翁記念文庫蔵

中央下に「明治七年二月是ヲ書 神崎屋義平」とある。

④⑦は、いずれも養子先の松岡で、家業に専念していた頃の作品である。

⑧十六羅漢図下絵 紙本淡彩 双幅

(右幅) 右下に「明治廿五年八月二日 小蝶楼十四月筆 俗名小倉儀平 三幅対 謹テ是ヲ書」(左幅) 左上に「明治廿五年八月三日 十六羅漢式福対 福井ニ於テ 小蝶楼十四月謹テ是ヲ書 行年 翁」とある。四十八歳の作品。

養子先、松岡での生活は二十数年に及んだが、絵に対する執念断ちがたく、一大決心の末、画家として再出発したのはこの頃である。即ち、妻や子を松岡に残し、一人福井(江戸下町三六番七)へ出て画業に専念することとなった。一方、残された家族は、師福(儀平)の実家から傘・提灯の製法を習い、正利や喻吏治鱗が上絵を描いて販売し、家計を助けたという一平林きみを氏談(『菱川師福展』昭和四十九年・松岡町教育委員会)。

なお、本図に見られる「十四月」の由来について師福は、⁽⁴⁸⁾(馬威図献上に付披露挨拶状)の中で「十四ヶ月母体ニ在リシノ故ヲ以テ名ヲ十四月ト称へ」と述べている。

⑨ 浮世画盆踊図下絵 紙本淡彩 一幅
一一・〇×五〇・五 菱川師福翁記念文庫蔵

左上に「七月□ 明治廿八年五月十五日是ヲ書 十四月筆 浮世画盆踊図」とある。五十一歳の作品。

⑩ 児普賢菩薩図下絵 紙本白描 一幅
七二・八×四二・四 菱川師福翁記念文庫蔵

左上に「児普賢菩薩 明治廿八年二月是ヲ書 十四月筆」とある。

⑪ 玄奘三蔵図下絵 紙本白描 一幅
八四・八×四五・八 菱川師福翁記念文庫蔵

左上に「明治廿九年十一月是ヲ書 日本美術協会全廿八年

春季展覧会出品唐人ノ筆玄奘三蔵像写 参考品 十四月下書」とあり、某中国画家の作品を臨写したもの下絵である。

⑫ 正観世音菩薩図下絵 紙本白描 一枚
九〇・二×四二・〇 菱川師福翁記念文庫蔵

右上に「明治廿九年十二月是ヲ書 正観世音菩薩 十四月筆」とある。五十二歳の作品。

⑬ 劉伯倫図下絵 紙本墨画淡彩 一幅
三五・五×二三・四 菱川師福翁記念文庫蔵

右上に「明治三十四年八月日百幅会ニ付下図之 賛成員 歩兵第十六連隊長・陸軍歩兵大佐^{正六位勲三等}三原重雄殿依頼 菱川師福筆」とある。五十七歳の作品。

明治三十二年、県知事関新吾より「菱川師福」の画号を贈られ、その二年後には、師福を支援する福井県絵画奨励会(百幅会・⁽⁴⁶⁾参照)が結成されるなど、ようやく画家としての地歩を占めるに至った。本図は、百幅会賛助者の一人、三原重雄(鯖江歩兵第三十六連隊長 明治三十七年八月二十七日、日露戦争により戦死)の依頼によって描いた作品の下絵で、「十六連隊」とあるのは誤記である。

劉伯倫(劉伶)は、中国六朝時代、晋の人(三世紀頃)で、本図は、一壺酒を携え、人をして鍤を荷って随わせ、「我死なば便ち我を埋めよ」と言ったという故事を描いている。

⑭ 支那人物図下絵 紙本墨画 一幅
一五一・〇×九三・〇 菱川師福翁記念文庫蔵

左下に「明治卅五年一月卅日 菱川師福是ヲ書」とある。五十八歳の作品。

一六三・八×八六・八 菱川師福翁記念文庫蔵

⑮百福図下絵 紙本白描 一幅

右下に「明治卅六年七月 菱川師福筆(印)」とある。五十
九歳の作品。

一〇六・〇×五七・八 菱川師福翁記念文庫蔵

⑯廓子儀図下絵 紙本白描 一幅

左上に「大阪於テ明治参拾五年内国勸業博覧会出品 菱川
師福図之」とあり、明治三十六年大阪市天王寺で開催された
第五回内国勸業博覧会(三月一日〜七月三十一日)に出品し
た際の下絵である。『福井評論』第八卷第十二号(昭和七年・
福井評論社)によれば、出品作は陸軍中将前田隆禮(男爵)
の家什となっている。

一三〇・八×七三・八 菱川師福翁記念文庫蔵

⑰浮世絵十二箇月図下絵 紙本淡彩 一幅

花火・舟遊び・盆踊り・月見などを題材に、元禄時代の風
俗を描いた屏風絵の下絵である。現存する一一幅の内、八幅
に書き入れがあり、明治四十一年(一九〇八)六十四歳の作
であることが知られる。

菱川師福翁記念文庫蔵

⑱梧桐鳳凰図襖絵 紙本金地着色 八面

浄土真宗出雲路派本山、毫撰寺(武生市清水頭町)阿弥陀
堂の襖絵で、落款に「菱川師福筆」とあり、「佳嶽堂」師福
の朱文方印が捺されている。

明治四十四年(一九一一)毫撰寺の親鸞上人御遠忌六百五
十年を迎えるにあたり、師福は御影堂・阿弥陀堂内陣の莊嚴
を依頼され、襖絵のほか、天井絵・壁画(⑲)等を揮毫した。
これらは総て、師福一人の手になるもので、家族と共に寺に

寓居し、数年の歳月を費して完成させたという。時の二十三
代藤善聴法主は、師福の画業を支えた一人で、同四十一年、
美術寮百福会設立の際、名誉賛助員として名を連ねている
(⑰参照)。

なお、本襖絵に見られる画号「佳嶽堂」は、曹洞宗大本山
永平寺六十四世森田悟由禅師より贈られたものである。『福井
評論』第八卷第十一号 昭和七年・福井評論社)

二二五・〇×四〇六・〇(四面) 武生市 毫撰寺蔵

⑲毫撰寺御影堂内陣天井絵・壁画(写真パネル展示) 一〇点
師福六十七歳(明治四十四年)頃の作品群。御影堂内陣の
腰板部分に「明治四十四年歳在辛亥初春 六十七翁 菱川師
福謹図之(印)」とある。天井絵は、御影堂内陣に二八四枚、
阿弥陀堂内陣に二一一枚、計四九五枚を数え、すべて師福一
人の手になる。

武生市 毫撰寺蔵

⑳馬威図屏風下絵 紙本白描 一隻

右下に「天保時代風俗 越前福井松平城内正月馬威図之
大正四年乙卯歳佳嶽堂菱川師福七十一翁筆」とあり、福井城内
の鉄御門から桜御門にかけての様子が描かれている。

一五七・六×三四二・八 菱川師福翁記念文庫蔵

(馬威し行事)

福井藩独特の正月行事。毎年正月十四日(左義長の前日)
紅白縮緬のたすきなどで装った青年藩士が、愛馬に鞭をいれ
街路を疾走し、これを町・農家の若者が鉦・太鼓を打鳴らし
つつ攻めふさぎ、勇壮な競合いを展開したもので、藩士の馬
術練磨、軍馬としての鍛練を目的としたばかりでなく、士庶

の融和をもちかけた一大行事であった（詳細は⑳「馬威由来書」参照）。

師福は晩年、子供の頃に目撃した記憶をもとに、馬威しの作品を数多く描き、明治以降、廃絶したこの伝統行事を、絵として後世に伝えた。師福の代表作であり、現在、福井市文化会館の緞帳や、福井厚生年金会館ロビーの陶板画などに採用されている。㉑㉒㉓参照。

- ⑲ 宿瘤採桑図下絵 紙本白描 一巻
右下に「大正十三年一月十日図之 八十翁 佳嶽堂師福筆」とある。

- 三六・九×一二一・三 菱川師福翁記念文庫蔵
⑳ 馮昭儀図下絵 紙本白描 一巻
左下に「大正十三年^{（一九二四年）} 知多郡常滑北條而テ図之 八十翁菱川師福下描」とあり、愛知県知多郡常滑町北條（現、常滑市）で描いた下絵である。北條は、四番目の妻つねの子、松嶋松太郎氏（明治四十一年生）の住居先で、師福はこの前後、よく北條に通っている。

松太郎氏は、義父師福の勧めで常滑陶器学校（現、県立常滑高等学校）に入學し、卒業後、陶工として活躍した。昭和十四年頃、北條から瀬木（現、常滑市）に移り、師福の最期を見送った（松嶋松太郎氏談）。

- 三八・一×一三一・〇 菱川師福翁記念文庫蔵
㉑ 涅槃図下絵 紙本白描 一幅
下絵二枚の内、一枚（断片・左上隅部分）に「大正十四年^{（一九二五年）} 乙丑歳 愛知県名古屋知場町三ノ切 涅槃曼陀羅画像 永昌院依頼ニヨリ下描図之 北国越前国福井市 佳嶽堂菱川師福

八十一翁」とある。名古屋市中区矢場町・永昌院の依頼によって描いたもので、作品は現存していない。

永昌院は曹洞宗で、二株山と号し、現在、中区松原二丁目二十一に所在する。

- 二二〇・三×一七二・三 菱川師福翁記念文庫蔵
㉒ 涅槃図下絵 紙本白描 一枚
左上に「^{（一九二四年）} 年八十二翁 菱川師福」とあり、松岡町芝原・昌藏寺蔵「涅槃図」（絹本着色）の下絵と思われる。同寺のそれは、昭和初年に、門徒で福井市在住の南部外吉より奉納されたもので、落款に「日本絵画師 丙寅八十二翁 菱川師福謹図（印）」とある。詳細は『松岡の涅槃図・曼荼羅—仏教美術展—』（昭和六十一年・松岡町教育委員会）参照。

一一二・五×六七・〇 菱川師福翁記念文庫蔵
㉓ 布袋図 絹本墨画 一枚
落款に「昭和六年^{（一九三一年）} 初夏 八十七翁菱川師福筆（印）」とある。師福自筆の添書（㉔）によれば、若くして東京へ出た長男小倉啓三郎（明治八年生、昭和六年現在六七歳）に贈ったものである。

- 三五・七×八五・二 相模原市 小倉雛子氏託 一通
㉔ 布袋図添書
㉕ の添書で、制作にあたっての心境や画法について述べている。書中「宜しく之に對するなは父に對するか如く思ふべし」などあって、父親としての温かい気持が溢れており、師福を知る上で興味深い。

- 三二・七×四六・三 相模原市 小倉雛子氏託 一幅
㉖ 親鸞上人石枕図下絵 紙本白描

右上に「昭和七年五月吉日此図描キ 八十八翁菱川師福」とある。

一〇八・五×四三・六

菱川師福翁記念文庫蔵

松に鳩図 絹本着色

一幅

落款に「昭和七年申陽春 八十八翁 菱川師福筆(印)」とある。

一一四・一×四一・五

菱川師福翁記念文庫蔵

橘曙覧肖像画 紙本墨画

一幅

落款に「昭和七年申歳為橘曙覧翁記念 八十八翁菱川師福図之(印)」とあり、昭和七年十一月、福井市立図書館で開催された「曙覧遺墨展覧会」に、参考品として出陳したものである。幼少の頃、曙覧に手習いを受け、その嚆矢に接した師福ならではの作品で、肖像画としても重要である。

〔橘 曙覧〕

文化九年(一八一二)福井城下石場町(つくも一丁目)の紙商正玄五郎右衛門の長男として生まれた。幼名は五三郎、はじめ尚事、のち曙覧と改めた。少年時代は府中(武生)の母の実家で養育され、日蓮宗妙泰寺明導に就き仏教を学び、のち京都へ遊学して児玉三郎から漢学を学んだ。しかし、我國の古典の研究に志して家を異母弟宜に譲り、足羽山に隠棲(黄金舎)し、飛驒高山の国学者田中大秀に入門して大いに得るところがあった。三十七歳の時、三ツ橋(照手三丁目)に移り、以後この家を薬屋と号した。曙覧の歌人としての業績は、ほとんどこの薬屋でなされ、のち松平春嶽によって志農夫廼舎と改められた。清貧の中で国学と作歌に精進し、近世末期の国学の精神に燃えて、独自の歌風を樹立したが、慶

応四年(一八六八)八月、五十七歳で歿した。

一一三・五×二七・二

本館蔵(旧市立図書館蔵)

なお、昭和八年一月発行『福井評論』新年号(福井評論社)に、師福の「曙覧翁と私」と題する追想録が収められている。本肖像画と不離一体のもので、参考迄に転載する。

(参考)

曙覧翁と私

菱川師福

私の幼少時代、三ツ橋の薬屋の寺子となつて、橘曙覧翁の尚事時代に読み書きをならひました。お恥かしいことではありますが、私は母親育ちで、殊に末ッ兒の事ですから、手にをへぬ我儘で、手習ひ等はうちやらかして、草紙の白いところを画をかきちらし、なまけ方途になまけて、絶えず塾に出入しました。提燈屋さん(常見野梅のこと)鍛冶屋の親爺さんの似顔等、かいて師匠に小言をいわれました。お師匠さんも小言をいひながら、似顔が似て居るので、六ヶ敷い顔をして居らる、下から、つい笑ひ顔にならる、のでした。時にお師匠さんの顔を、じつとながめて居ますと、わしの顔をかくのではないぞと、叱られたものです。

その時翁が私についての即興歌が出来たのでありますが、幼少の事でもあり、無頓着に気にもかけて居りませんでしたから、今は記憶もして居りません、実に残念なことであります。或は提燈屋さんの宅に、其歌稿が残つて居はしますまいか。

この間皆さんのおすゝめで、私の古い記憶を辿つて、翁の姿を書き、福井図書館主催の曙覧遺墨展覧会に、参考品として出陳いたしました。それは五六十枚も翁の顔を書いて見て、

其中から能く似たのを選び出したのであります。

御存知の通り、正玄家は橘七家の一で、由緒正しき富豪であり、翁は其正嫡でありますから、容貌は端正で、如何にも上品な面差で、頬がそげ、おとがひが張り、あごが一寸出て居りました。髪は総髪で無造作に束ねて居ました。肩はさしがたで、首を前の方に出して居ました。翁の歌に「やせ肩をそびやかしても誇るかな」云々といふのがありますが、いつも瘡肩をそびやかして居る、其上に猶やせ肩を聳して自慢をするといふのだから、どれ程肩を怒かしたのか、考へて見ると、自然に笑が出来ます。

翁は一向なりふりをかまはず、いつも浅黄木綿か小紋の布子を裾短かに着て、羽織がはりに、其頃流行した、もみ紙の上に黒漆をぬつた紙衣、今の合羽をつけ、指で其袖口をつまんで、人からのまれた歌などを、これだけは翁に不似合な、唐更紗の風呂敷につみ、腋の下にはさんで、一寸寒さうな様子とでもいう風で、草履ばきにて、とばくと用達しに出かけられたものでした。

私は翁に頼まれて、よく塩町まで味噌買にやられましたが、いつも喧嘩相手の悪太郎共が、「豊公どこ行く味噌買に、いうてくれるな恥かしや」とはやし立てます。私は腹を立て、いつもつれて居る犬をけしかけます。悪太郎共は犬の勢に辟易して逃げます。やい弱味噌と威勢を張ります。腕節では勝味がないので、いつも犬をつれて歩きました。何分私の実家は、父が死亡後だん／＼左前となり、私も近頃のはやり言葉でいへば、生活戦線に立たなければならなくなり、芸が身を助くる不仕合で、すきな絵が家計をたすけることになり、読

み書き等、一向に気乗りがしまん、それでも翁は、私の絵の天分を認めてくれたものと見え、絵を書くのならば、源氏物語や伊勢物語をよむがよいといふので、例の提燈屋さんの御世話で、買って頂いたものが、今も私の手許に残つて居ますが、曙翁の偉大さが、世間に認めらるやうになつた今日、閩巷に一管の筆を友とし、翁の風格を偲び感慨無量のものであります。

翁は塩町に隠居し風月を友として居られた紙山田の先々代と、いつもゆき、して交はり殊に深かつた。本居宣長の門人田中大秀先生等とも、始めてこの隠居で逢はれたといふことであります。所が山田家に田山応挙の筆になつた、揚貴妃の軸物がありました。翁は一日之を見て、是非かしてくれといふ。主人は秘藏品であるから取りあはなかつたが、翁は床からはづして持つて帰つてしまつた。しかし応挙の筆、然も濃艶な揚貴妃が、翁の趣味にあふものではありません。翁はやはり藁屋に自慢の雲華の幅、高芙蓉の不尽の枯淡さであります。果して四五日たつと、もう飽いてしまつたらしい。豊さん一寸山田まで使ひに行つてくれと、その軸物を風呂敷にして私が返しに行つたことがあります。それを私は今にして考へて見まするに、山田の主人は、持つて行かれた以上は、先づ返つて来ぬものと覚悟せねばならぬ。それをとめもせず、持たせて帰した主人も面白いが、いやになつたからと云つて何等の執着もなく返してしまふ、翁も偉いと思ひます。翁の歌を見ても、頗る情にもろい人であり、手を無くした時の歌に
きのふまで我衣手にとりすがり父よ父よといひてしものを
とあり、親を偲ぶ歌に

かみ白くなりても親のある人の多かるものをわれに親なしといふのでもわかります。世間ではかりもらひといふことは随分ある。殊に文筆によつて立つ人々の間には、必ずしも少なくない。権利とか義務とかいふことが、八釜しい現今ですから、随分さういふ風のこと、人から批難されて居るものもある。翁の貧乏暮して、可愛い妻子にも乏しい思ひをさせ居る。時には日々の米飯にさへ、事かくこともあつた。応挙の軸物といへば、其頃には随分値段のしたものでありませうが、自分が楽しむだけ楽しめば、それでよい、あとに何等の執着を残さぬ、翁の風格は、他人の真似の出来ない点だと思ひます。

松平春嶽公の藁屋へ御成の時は、急のことでありましたから、寺子一同追ひ払はれて、内部の様子などは知ることが出来ませんでした。翁が御成の御札に御殿に伺候しなければならぬのですが、かれこれする中、御殿から御召になりましたので、翁はいきともながら、御殿に上るのは駒屋善右衛門さん等が、百方説き聞かせて、其紋服を借衣してやつと御殿に出たと聞きました。

私が藁屋から下つたのは、絵でもつて家計を助けなければならなかつたことが、理由の一となつて居ますが、実は寺子の机を積重ねた上で、絵草紙で見た石橋の獅子の真似をして、師匠に叱られて、我儘ものの私はもう行かなかつたのであります。今から思うて見れば、冷汗が流れます。どうしてあの時、学問をしなかつたか、考へて見ると、是が私の一生ひけ目となりましたのでせう。

昨今翁の名が世間に顕はるゝのを見るにつけ、八十九歳の

高齡を嘆き、今一度若い時代からやり直したなら、もつと立派になり得たらうと、しみじみ感じて居る次第であります。新年早々つまらぬ御話を致して、相済まぬことであります。

③春駒図 絹本着色 一幅

落款に「八十九翁菱川師福筆(印)」とある。昭和八年(一九三三)の作品。

八七・〇×三四・三

③馬威図 絹本着色 双幅

落款に「安政時代福井藩松平馬威之図 昭和九年(一九四一)菱川師福筆(印)」とあり、九十九橋北詰(照手御門前)、および佐野屋敷(藩主馬見所)前に於ける攻防の様子が描かれている。②③④参照。

一二五・〇×五六・〇 福井市 荒井公一氏託

③福祿寿図色紙 紙本着色 一枚

落款に「昭和九年甲戌陽六月 九十翁菱川師福筆」とある。

二七・二×二四・二

③韓信股ぐり図色紙 紙本着色 一枚

落款に「九十翁菱川師福筆」とある。

二七・二×二四・〇

③菜祀図屏風 紙本金雲著色 六曲一双

今立郡今立町栗田部に鎮座する、岡太神社(田県社)の宝物で、毎年二月十三日に行われる同社の祭礼「御菜祀」を描いたものである。「おらいし」は、鯖江市や今立町で見られる民俗行事であるが、岡太神社のそれは、継体天皇の即位を記念し、樟葉宮への行幸に擬する神事と伝え、最も著名、且つ盛大である。

本屏風は、昭和十年（一九三五）十月十二日、粟田部出身で東京在住の島連太郎・同夫人玉代、福井在住の宇野善左衛門の三名により奉納されたもので、右隻には継体天皇の偉業・遺徳、左隻には祭礼の様子が描かれ、それぞれ落款に「昭和十年歳次乙亥孟春 浮世絵師佳嶽菱川師福九十一歳謹写（印）」（右隻）、「為粟田部 継体天皇宮請菜祀図屏風一 双画因写馬乃当写之也関均係 皇子汉龍当時之事其恩徳海岳尚不及遺業 遺徳等之事有不可不筆及者故併筆云 昭和十年歳乙亥孟春 日本浮世絵師菱川師福九十一歳謹写（印）」（左隻）とある。

③⑤ 寒山拾得図 絹本着色 一幅
一五五・五×三四二・八 今立郡今立町 岡太神社蔵

落款に「九十三翁 菱川師福筆（印）」とある。昭和十二年（一九三七）の作品。

③⑥ 韓信股くぐり図 紙本着色 一額
一一八・〇×四〇・九 菱川師福翁記念文庫蔵

落款に「九十三翁 菱川師福筆（印）」とある。

③⑦ 馬威図屏風 紙本着色 六曲一双
九七・〇×八〇・四 菱川師福翁記念文庫蔵

市内葵町（現、みのり一丁目）の豪商、片山外吉の依頼によって描いたもので、落款に「安政時代馬威之図 九十三翁 菱川師福筆（印）」（右隻）、「福井松平藩之図 九十三翁 菱川師福筆（印）」（左隻）とある。忠見慶造筆「馬威由来書」
③⑧ によれば、幼少の頃から幾度も目撃した馬威し（福井藩の正月行事）の様子を、後世に書き残そうと、絶筆の覚悟で揮毫したものという。②⑩⑪⑬⑭参照。

一五七・五×三四四・〇 福井市 片山外吉氏贈

③⑧ 馬威由来書 一卷

馬威図屏風（③⑦）に付随する由来書で、巻末に師福の描いた「安政時代愛宕山全景」「同 馬威ヲ举行シタル当時ノ地図」が付されている。由来書は、末尾に「昭和十二年六月七日 翠雲 忠見慶造（印）」とあり、県立大野高等学校教諭（数学）で歴史愛好家、忠見慶造の筆によるもので、屏風の来歴や、馬威行事について記されている。②⑩⑪⑬⑭参照。

三二・二×四一〇・〇 福井市 片山外吉氏贈
名物 福井 馬威の由来書

維新前我福井藩にて行はれたる馬威の競技は実に目覚しき争ひにて他藩には敢て見ることを得ざるものなり惜しい哉斯る名物の競技も維新の廃藩と俱に其技頽れて既に七十年の長きに及びぬれば唯々古老の語り草にのみ其名僅に残りてあたら其名物も市民に忘れんとする今日幸に市内五番町なる一代の画伯菱川翁の妙筆によりて漸く其埋滅を免れたり翁名は師福彼の師宣が末孫の如く聞ゆれども実は土佐派の大家にて其技の抜群秀逸なる恐らく現代の大家も必ず之には及ばざるべし然も当年九十三才の瞿矚たる老翁なれば幼少より幾度も馬威の競技を目撃し予てより其真相を写さばやと志し其為彩管を揮ひて緻密に物したる屏風既に三双に及びぬ然るに翁は尚夫れに憚らず最後の絶筆を揮はんものをと固く心に決したる折柄恰も良し市内葵町の豪商片山外吉氏之を聞きいかで其絵を譲り受けて我累代の家宝にせんものをと早速翁に乞うて一日も早く揮毫せられんことを願い出でぬ翁喜びてこれ我望む所なればとて快く直ちに承諾せられたり慙て半歳余りの月日を重ねて今茲に光彩いと鮮かに画かれたる空前の名画となり

て一雙の屏風の裡に籠められたり

諸其一隻には九十九橋と其上流なる練船の渡しとを隔て、南愛宕山の全景を描き出されたるも余りに現状と変りたれば一見直ちに隔世の感を懐かしめぬ先づ尾上には足羽大神殿尊く建立あらせられ右に降りて愛宕権現左には継体天皇の御石碑夫より降りて寿命院の塔其右に天満宮等ありて古松老杉參差として其間を点綴しいと神々しく挿せられたり

九十九橋は柴田勝家公の時石山の石材を取寄せ元八幡町に石橋を架けられたりしを松平藩に至り駒屋の地所に移し自然川幅広くなるにつれ石橋に継ぐに木材を以てせり斯様に木石半々に組合せたれば洪水の時流失する事あれども石造のみは猶依然として近年迄遺存せられたりとぞ橋成りて架換橋と名づけ後九十九橋と改む時の普請奉行其端に門を建て、用心に備へんと迄ひしに將軍家許し給はざりしかばいと愁はしげに鬱ぎ居りしを其妻慰めて石板橋に木戸門として更に願はれかしと勧めたれば奉行思はず手を拍ちて其如く願ひ出でしに果して難なく許されたりとぞ其妻の頓智なる古の形名の妻にも恥ぢざるべしとて皆人いたく称へあへり上流なる練船の渡しも敵の寄するを防がん為殊更に橋にはせざりきとなん

因に言ひ添へん九十九橋の下流より上流に向つて近村の名主達藩主に請ひ南岸の広き空地に数多の桃樹を植ゑたりしに次第に生長して後には見事なる桃林十数町に亘り大に河畔の面目を改めたり況して花の頃には一段の景趣を添へ橋上常に観客をもて充たされたり桃樹の中にも橋下近く迄生ひ延びたる大木あるを見て或人の詠みたるも少しで桃(百)に届くや九十九橋の句は近年まで盛に人口に膾炙せり

次に今一隻の屏風には例の名物馬威を心行く迄綿密によく写し出されたりそも此馬威の起原は昔戰場にて騎馬の往来せる時俄に起れる砲声火災に或は聞き怖ぢ驚かされて駆引不便なる処より思はぬ不覚を取ることありしをいかで其癖を矯めしめんとして我藩主の特に始められたる一種の訓練競技なりきされば期日も正月十四、五の両日と定めて折しも各町毎に三毬打を設けたればうち囃す大鼓小屋の響とわざと叫ぶ鬨の声燃之上る凄じき火焰などに少しも動ぜざるやう訓練せしめんと有難き御計らひなりとぞ依て十四日には馬を威して士民に其技を戦はしめ十五日には早朝再び馬を揃へて各町にて燃す三毬打の火を見しむる事始と年中の行事とはなれりしなり

時は安政六年正月降り積れる師走の雪も消え果て、空さへ晴る、十四日の卯の上刻今しも神明前を打たする先陣は何れも家老の若君達にて年六七歳許なるが陣笠陣羽織の美々しき打扮にて各々家臣に擁護せられつ、馬上裕に樓門を本町へと歩ませらる之を合図に続いて打たする第二陣ハ之ぞ今日の主役を勤むる藩中屈指の達人揃ひにて同じく陣笠陣羽織に身を固め足並揃へて角酒井邸に並びたる紅葉本多邸の前面にてそ打出でけれ此処より樓門迄は櫛形とて千余坪もあるべき邸内随一の大広場なれば予て此処にて待ちあぐみたる数多の列卒の町民どもスハ出で来れりとして咄と嘯いて馬前を遮る騎士は怒つてさはさせじと縦横無碍に馬を飛ばせて駆けて行く列卒も屈せず跡追ツかけて之を堰く或ハ銅鑼銃を鳴らし或ハ章魚の帽子赤旗などを竿の先につけて之を威し只管騎馬の自由を妨げんとす騎士もさるもの忽ち馬を旋らして後足にて列卒を蹴飛ばしひるむ処を潜り抜けて前進す恁て本町筋を露地に

九十九橋の木戸門荒木駒屋の前に至れば列卒ハ一層勇奮つて此処を先途と防ぎ寄る夫にも屈せず蹴飛ばし跳散らして元の道に引返せば之を当日の偉勲者とすされど斯る人は至つて罕にて中には巧妙なる列卒の働きに馬立ち辣みて進退叶はず詮方なさに降り乞へば一度に拳ぐる鬨の聲に赤恥搔いて逃ぐるもあり又或武士ハ防ぎかねて馬より挫と墮さる、をサア志てやつたりとて取り押へ大勢に胴拳せられて面目玉を潰すもあり又辛うじて圍みを脱し得たれども元来し道へ返す事叶はずして或は本町へ落つるもあり或は呉服町より柳町に折れ小馬出より又元の広場に出で、再び堰かる、不幸の者もありて千差万別其間藩公ハ萩野有賀兩郎の向側なる佐野邸の御物見物に成られて始終是等の争を視られつ、互の優劣を判じ給ひいとも熱心に心を配られけるとん

抑々当日は士民平等の権利にて日頃町民を見縊り居りし侍も忽ち重圍に陥りて頭を下る見苦しき為体や之に反して町民もいつしかと思ふ折を得て図らず武士を凹ましつ、勝鬨揚る両手の得意や又堰く人の手を出す事法度なるより拳を袖に翼の如くに張り頬被る手拭の端を突出し之も嘴の如くに見する滑稽なる威し振又列卒の馬に蹴られて仰向に倒れし上に又倒されて思はず頭を下なる人に足蹴にされたる或は奔馬を避けんとて父の手を離れ泣き叫びつ、あちこちと彷徨ひ歩く子供のみじめさ又同じ子供なれども父の背に負はれつ、騎馬を見真似にどう／＼と肩うち叩く無心の愛嬌或は擔前なる太き矢来を馬の為に蹴倒されて中なる見物人慌てふためき右往左往するさまなど云い続ければ尚あらん何れも微に入り細に亘りて克明に描き出されし燃屋なる筆の跡見れば見る程情迫りて恰

も其時に生れて実景に接するが如き感あり宜なる哉八十年來一日も形管を手にはせざるなき菱川翁の精根ならずばいかでか斯くの如くなるべきと只管芸術の貴さを感じられつ、偶々この絵の來歴を綴るに方り聊か卑見を加へんとて不文を顧みず斯くは物しつ

昭和十二年六月七日

翠雲

忠見慶造

(印)(印)

③⑨ 習作画帖類

一六冊

師福の習作画帖類で、表題に「畜獸」「龍魚蟲介」「鳥類」「樹竹」「果蕪」「春之部」などがある。随所に見られる書き入れから、明治三十年(一八九七・五十三歳)前後に描かれたものと推察され、「小蝶亭十四月」「北松楼十四月」「菱川師十四」といった、師福以前の画号も見られる。

菱川師福翁記念文庫蔵

④⑩ 模写絵類

一〇点

菱川師宣「神人治遊図」ほか、円山応挙・松村景文・仇英などがある。

菱川師福翁記念文庫蔵

④⑪ 画材用収集資料

二〇点

各種絵葉書・写真・切抜帳ほか

菱川師福翁記念文庫蔵

④⑫ 蔵書類

三〇点

美術関係の書籍・図録・雑誌類ほか
菱川師福翁記念文庫蔵

④③ 絵道具類

一 二 点

師福常用の絵道具類で、拡大鏡（径九厘）をはじめ、絵筆・刷毛・羽箒・物指・絵具などがある。

④④ 落款印

菱川師福翁記念文庫蔵 九類

「十四月画印」「佳嶽」「佳嶽師福之印」「師福之印」など、生涯を通じ愛用した落款印である。

④⑤ 「西尾家家集」

一 綴

師福が纏めた西尾家の記録で、明治二十四年（一八九一・四十七歳）に起筆、昭和三年（一九二八・八十四歳）に至る。師福の経歴・家族関係等を知る上の根本史料である。

④⑥ 絵画奨励会主旨

（印刷）

一 通

明治三十四年（一九〇一・五十七歳）、地元の有志を中心に、師福を支援するための絵画奨励会が結成された。百幅会を催し、希望者に揮毫作品を頒布するものであったが、同三十七年日露戦争の勃発で中絶の止むなきに至った。④⑦参照。

絵画奨励会主旨

菱川師福翁記念文庫蔵 二七・〇×三七・九

今や各地画会の設けあらざるなく而して名家の品評を請ひ観客の瀏覽に供するは是れ一に斯道の発達を図り延て一般美術心の興起を促さんが為なり抑も本邦は古来画家に富み就中元慶年間に巨勢の金岡美弘^{（つとむ）}年間に土佐家の祖春同基光等最も著名にして又慶長元和年間に至り浮世画なるもの隆盛を極め広く画界に愛慕せらるる岩佐又兵衛其祖先たり夫より下て元祿年

間菱川師宜其流を継ぎ画風の発達を謀り其風伝へて今日に及ぶ其画風や極めて緻密にして頗る艶麗愛すべし当市の画家菱川師福氏夙に土佐画の風を慕ひ大に其妙を極む則ち茲に画道奨励会を開き先全氏に謀りて全氏の百幅会を催し大に斯道を奨励せんとす全氏則ち喜んで之に応じ直ちに一百幅の揮洒に着手せられんとす乞ふ大方の諸君本会的主旨を賛し全氏揮洒を望まる、諸君は此際申込あらんことを

名譽賛助員

福井県福井市絵画奨励会発起人

- 岩 男 三 郎 君 妹 沢 政 雄
- 後藤松吉郎君 井 川 武
- 藤 好 乾 吉 君 広 瀬 博 久
- 植木半治郎君 竹 尾 茂
- 高知県土佐裁判所長 岐 卓 田 井 重 之
- 村上 方 君

絵画奨励会申込書

福井県絵画奨励会

菱川師福画伯筆
一絹本幅横縦尺寸寸分堅物

画	図	題
幅	類	
図	図	合計
葉	葉	葉

右貴会的主旨を賛し前記絵画揮毫申込候也

明治卅四年 月 日

県 郡市 村町 番地
賛成人

絵画奨励会

發起人 御中

①美術寮並百幅会設立趣意書 (印刷)

一通

明治四十一年(一九〇八・六十四歳)、師福自ら設立を發起した美術寮・百幅会の趣意書で、名譽賛助員には旧藩主松平家・旧鯖江藩主間部家・永平寺六四世森田悟由禪師・毫撰寺第二三代藤善聴法主など、時の名士が名を連ねている。

趣意書によると、本会の事務局は市内尾上下町(現、宝永三丁目)竹沢市郎平宅に置かれたが、市郎平は三等郵便局「尾上町局」の局長で、会計事務に精通していただけでなく、師福の良き理解者でもあった。

二七・〇×三八・九

菱川師福翁記念文庫蔵

曰く美術寮曰く絵画百幅会抑これ何物ぞ寮とは今や余輩が設立の事を發起せるもの会とは去三十四年夏余輩が画を懇望せらる、諸氏が県下斯道の発達を図り延て一般美術心の興起を促さんがため組織せんとしたるもの然して余輩はこゝに改めて其会を組織し規模を増大せしめて会を十回して百幅は以て千幅に達せしめ会収入の醸金により寮設立の事にかゝる幾多の経費を求め得んことを欲す先に諸氏が組織せんとしたるの会は事稍緒に就かんとするに及んで端しなくも三十七八年役起り止むなくも中絶の姿とはなりたるも今將た本会を喚起し来て而も寮設立の事のためにせんとすと云ふに至りては諸氏も亦必らずや宿志の將に伸なんとするを懼ばる、や疑なかるべきなり幸に世の寮設立の事にかゝる助成の労を惜まれざらむとするの諸氏にありては仰ぎ冀くは奮て本会に賛助加入あらむことを祈て止まざるなり

明治四十一年八月

發起人 菱川師福

名譽賛助員

- 松平侯爵
- 間部子爵
- 森田悟由師
- 藤善聴師
- 杉田定一君
- 森広三郎君
- 中村純九郎君
- 山品捨録君
- 土生彰君
- 今村七平君

会則

- 第一條 本会ハ菱川師福筆希望者ヲ以テ組織ス
- 第二條 會員ニハ左ノ画筆ヲ頒ツ
縦三尺八寸横一尺五寸ノモノ一葉同様ハ特ニ好ミアルニ非サルモノハ筆者ノ随
- 第三條 會員タルモノハ会費金五円差出サルベシ画本料ハ
此外トス
- 第四條 本会事務所画筆申込所ハ仮ニ福井市尾上下町竹沢
市郎平方ニ設ク
- 第五條 本會員タラントスル者ハ申込書ニ調印ノ上事務所
又ハ其他ノ申込所へ差出サ
- 第六條 會員中第二條ニ記スル大幅望マル、トキハ会費ノ
外相当ノ揮洒料ヲ差出サル

第七條 百幅会開設ノ際遠隔ノ地ヨリ送幅アリタル分ハ本
会費用ヲ以テ返送ス

第八條 本会ノ会計事務ハ竹沢市郎平コレニ当ル

第九條 会費及画本料ハ竹沢市郎平ニ交付アルコト

⑮馬威図献上に付披露挨拶状 (印刷) 一通

大正十三年(一九二四)十一月、皇太子殿下(昭和天皇)

福井行啓の折、師福(八十歳)は、最も得意とする「馬威図」
三枚一組を献上し、採納の栄に浴した。本状は、その披露挨
拶状である。詳細は『稿本福井市史』下巻、第一編第四章(昭
和十六年・福井市)参照。

三三・二×三九・七(折紙) 菱川師福翁記念文庫蔵

謹啓

之砌各位愈御清穆之段欣賞不斜候扱過般ハ畏クモ

撰政宮殿下 当市ニ行啓被為在親シク民情ヲ視察セラル御同
様恐懼措ク能ハサル次第ニ御座候時ニ不肖老後ノ思出ニ旧幕
時代年中行事タル越前名物馬威ノ絵画壹対ヲ謹写シ高齡者ノ
献上品トシ献納願出ノ処諸官ノ御執成ニ依リ幸ニ御採納ノ栄
ヲ荷ヒ余命ナキ老爺ノ悦ビ何ニカ仮令エン我経歴トシテ見ル
モノナキモ弘化二年五月福井西尾家ニ生レ十四ヶ月母体ニ在
リシノ故ヲ以テ名ヲ十四月ト称ヘ後儀平ト改ム又松岡小倉家
ヲ継ギシモ復婦シタリ幼少ヨリ画ヲ嗜ミ十二歳ノ時西別院天
井ニ諸種ノ絵ヲ描キシヲ覚ユ其頃遊画家頼山伯ニ斯道ヲ学ビ
爾来漫画ヲ写シテ帝都ニ遊ブ時菱川師宣ノ日本浮世絵ニ大ナ
ル趣味ヲ抱キ自ラ是ニ娛ム時元福井藩ノ家老職タリシ松平正
直男時ノ内務次官又本県知事関新吾氏等ニ賞讃セラレ雅号菱
川師福ヲ贈ラル爾来濃尾地方ニ於テ需ニ応シ墨痴スル事多年

偶々故郷ニ盛事アルヲ伝工座視スルニ忍ヒズ還リテ杖ニ寄り
白髪ヲ憚ラズ高齡者ノ列ニ加ハリ近ク鳳車ヲ拝シ又拙筆御採
納トナル光榮欣喜交々起リテ歇マズ聊カ祝宴以テ諸士ニ報イ
ン心情ナリシモ顧レバ勤儉節約ノ御聖旨ニ背クノ所以ヲ以テ
唯是ヲ記念スベク拙筆壹幅ヲ贈呈シ師福ノ微志ヲ酌レ候ハ、
幸甚ノ至ニ御座候 頓首

大正十 年 月 日

菱川 師 福

様

平林清輝

明治二十一年(一八八八)十月、菱川師福の三男(母説)

として、松岡に生まれた。幼名は喩(ゆ)吏治(じ)麟(りん)、のち清輝と改め、
母の旧姓を名乗った。

幼少より、父師福の薫陶を受け、関西地方に遊学して画技
を深めた。その後、昭和初年に上京し、専ら東京を舞台に活
躍、仏画・美人画家として大成した。昭和三十八年(一九六
三)七十五歳で歿す。

⑲九十九橋図 絹本著色

福井城下の足羽川に架かる九十九橋の図で、橋上からの桃
の花見を描いたものである。もと福井図書館の所蔵であつた
が、のち福井市役所市長室に掲げられ、昭和四十八年(一九
七三)当館に移管された。落款に「清輝写(印)」とある。

本作品の制作年代は明らかでないが、昭和二年(一九二七)
四月に来福した、旧福井藩のお雇い外国人教師、W・E・グ
リフィス博士夫妻に、明新会(福井中学同窓会)より贈られ

た清輝揮毫の作品と酷似している（昭和二年四月十四日付、大阪朝日新聞福井版参照）。

六四・一×八五・〇

本館蔵

⑤① 聖徳太子図 絹本著色

一幅

昭和四十年（一九六五）四月、平林清輝の未亡人、末子氏より寄贈されたもので、落款に「清輝（印）」とある。末子氏の談によれば、昭和十〇十五年（一九三五〜四〇）頃の作品という。

八四・〇×六九・五

東京都 平林末子氏贈

⑤② 平林清輝絵葉書

昭和四・八・十年 菱川土萌宛 九通

仏画・美人画家として、中央の画壇で活躍する清輝が、異母妹にあたる福井の上萌に宛てたものである。書中、「出来るだけよい道具を使って出来ればよい仕事をして下さい」「岩絵具の焼方も其の折やいて見せます」などと、絵の制作について心温かい助言を与えている。

菱川師福翁記念文庫蔵

菱川土萌

明治二十八年（一八九五）六月、菱川師福の六女（母やな）として福井市に生まれる。本名、西尾琴房。父師福の薫陶を受けて画業を志し、師福の晩年の活動を支えた。昭和十三年（一九三八）頃、異母兄の平林清輝を頼って上京、児玉希望（川合玉堂門下）に師事した。

政治や婦人問題についての関心も強く、市川房枝など女性活動家との親交もあったという（実妹、豊島初音氏談）。昭和二十九年（一九五四）三月、神戸市で歿す。享年六十。

⑤② 神功皇后図 紙本著色

一幅

落款に「高等小学校二年 菱川次女 西尾琴房女史（印）」とあり、明治三十九年（一九〇六）の作品。応神天皇を抱く武内宿禰と神功皇后が描かれている。

寄贈者の平井友枝氏は、師福の孫（母若菜）にあたる。

一二六・五×五一・〇

豊中市 平井友枝氏贈

⑤③ 菩薩坐像 絹本著色

一一七・二×四二・〇

菱川師福翁記念文庫蔵

⑤④ 観音来迎図 絹本著色

落款に「ともえ（印）」とある。

一幅

一一三・七×五〇・八

菱川師福翁記念文庫蔵

⑤⑤ 夏美人図 絹本著色

落款に「琴房（印）」とある。

一幅

一一一・五×四〇・七

菱川師福翁記念文庫蔵

⑤⑥ 唐人図 絹本著色

一一一・六×六三・〇

菱川師福翁記念文庫蔵

⑤⑦ 日の出図 絹本著色

「土萌」の白文方印が捺されている。

一幅

一一九・八×三九・八

菱川師福翁記念文庫蔵

⑤⑧ 牡丹図 絹本著色

「土萌」の白文方印が捺されている。

一幅

四三・二×三七・三

菱川師福翁記念文庫蔵

⑤⑨ 海老図色紙 紙本著色

落款に「土萌（印）」とある。

一枚

二九・三×三〇・五

菱川師福翁記念文庫蔵

⑥⑩ 聖母マリア図下絵 紙本白描

一枚

一枚

二七・一×二七・五

菱川師福翁記念文庫蔵

⑥菱川土萌書状 三月二十四日付 豊島初音氏宛

一通

昭和十三年（一九三八・四十四歳）頃、土萌は異母兄の平林清輝を頼って上京し、川合玉堂門下の兒玉希望に師事した。しかし、戦争のため、やがて東京を去り、愛知県知多郡鬼崎町の別荘地、海泉（現、常滑市末広町）に閑居した。

本書状は、実妹で神戸市在住の初音氏に宛てたもので、志半ばで断念せざるを得なかったことの無念さが、行間に溢れている。

菱川師福翁記念文庫蔵

調査協力および写真提供（敬称略・順不同）

明神社（松岡町）	小倉 雛子
毫撰寺（武生市）	小倉 逸郎
永昌院（名古屋市）	伊藤 さだ子
昌藏寺（松岡町）	伊藤 節子
岡太神社（今立町）	平井 友枝
興宗寺（福井市）	伏里 伸一
熱田神宮宝物館	平林 照雄
ねこせや	豊島 初音
松岡町教育委員会	松山 嘉成
福井県経済農協連印刷加工課	松嶋 松太郎
	松嶋 幸治
	都築 青峰
	竹沢 旭平
	安島 敏男
	水野 ともえ
	寺嶋 清
	寺嶋 勇
	平 弦月
	東 昌弘

編集担当者

編集
解説

学芸員 西村 英之

" 足立 尚計

嘱託 花川 義幸

表紙図版

菱川師福筆「馬威図屏風」⑤

平成三年度秋季特別展

菱川師福翁記念文庫展

発行 平成三年一〇月

編集 福井市立郷土歴史博物館

〒910 福井市足羽二丁目八番一六号

電話(〇七五) 三五二二八四五

印刷 河和田屋印刷株式会社

福井市立郷土歴史博物館